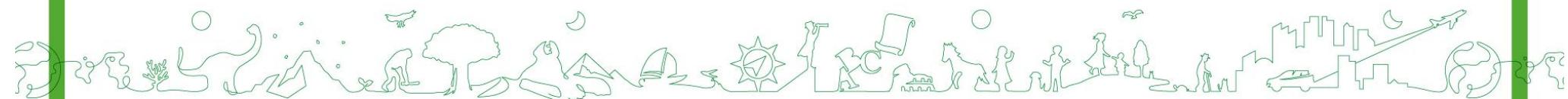




保険フローの「長期化・拡大・安定化」に関する実装と進捗

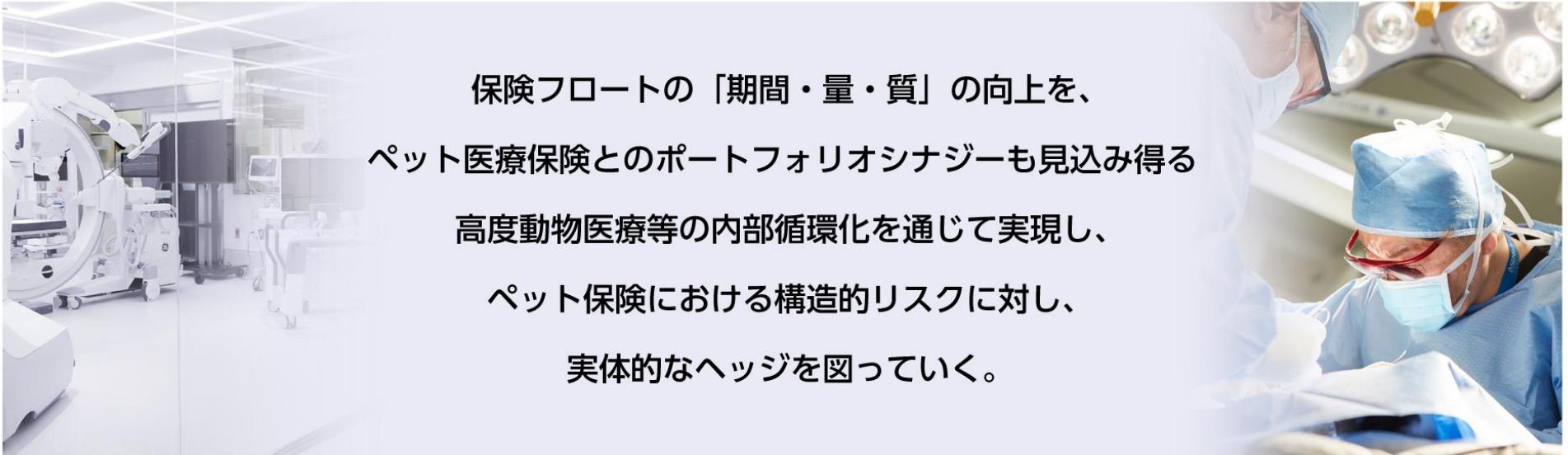
保険の保険

～高度動物医療等の内部還流化による
構造的リスクに対する実体的ヘッジ～

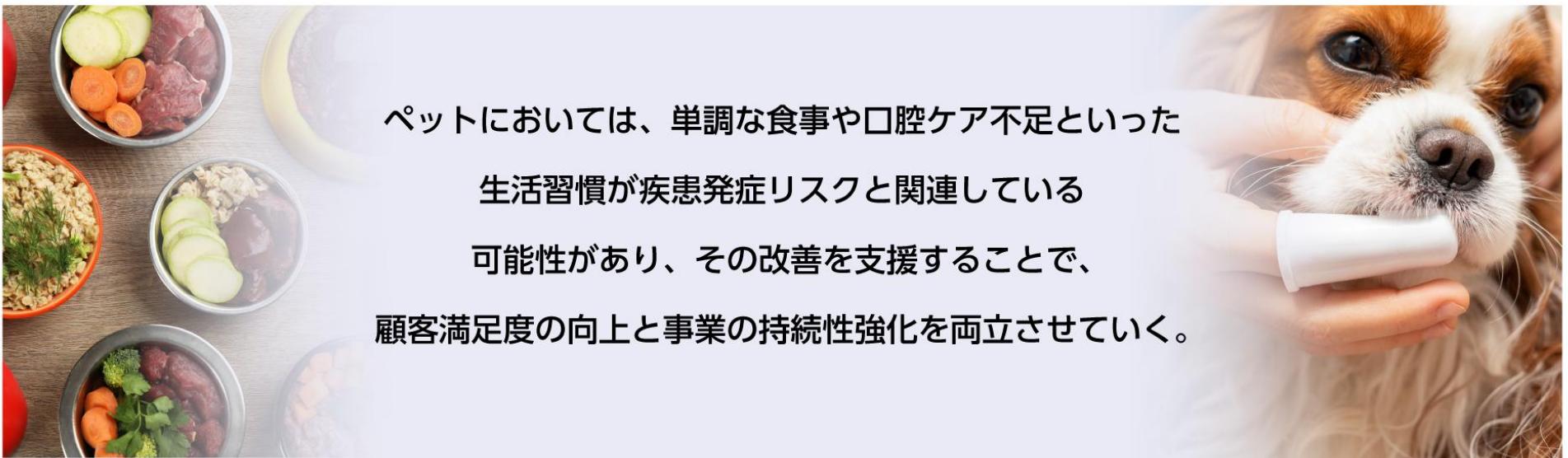


アニコム ホールディングス株式会社

CO anicom®



保険フロートの「期間・量・質」の向上を、
ペット医療保険とのポートフォリオシナジーも見込み得る
高度動物医療等の内部循環化を通じて実現し、
ペット保険における構造的リスクに対し、
実体的なヘッジを図っていく。



ペットにおいては、単調な食事や口腔ケア不足といった
生活習慣が疾患発症リスクと関連している
可能性があり、その改善を支援することで、
顧客満足度の向上と事業の持続性強化を両立させていく。



●フロート運用の位置づけについて

保険会社は、将来の保険金支払い義務に備えるため、保険料を先んじて受領している。この「統計的に保険金支払いが発生するまでの期間に手元に存在する資金（フロート）」を、「医療・予防・高度医療への適切な資本配分を通じて、社会全体のリスク構造を改善する形で運用すること（フロート運用）」は、保険会社に固有の社会的責務であり、同時に中長期的な競争力の源泉である。

●フロートにおける期間・量・質の強化について

フロートの価値は量もさることながら、期間（duration）と質（安定性・予測可能性）が重要である。これらは、保険の進化段階（保険1.0～3.0）を通じて、構造的に強化し得る。

- 保険1.0：リスク引受による安心の提供
事故・疾病発生後の治療費負担に対し、迅速かつ心理的ケアを含めて対応することで、社会的セーフティネットとしての基礎的機能を果たす。
- 保険2.0：予防の支援（発症確率の低下）
保険加入者の真のニーズの一つである予防を支援することにより、疾病的発症確率および発症時期の後ろ倒しが生じ、結果としてフロート期間の長期化および累積フロート量の増加に寄与し得る。
- 保険3.0：高度医療への最適接続（支払分散の滑らか化）
傷病発症後においても、侵襲が少なく、後遺症リスクが低く、成功率の高い医療へのアクセスを支援することで、保険金支払い自体の最適化、時間的・金額的分散が縮減され、フロートの質（キャッシュアウトの安定性・予測可能性）の改善につながり得る。

●フロート強化と経済的循環

これらの取り組みは、

- ・保険加入ニーズの最大化
- ・継続率の向上
- ・マーケティングコストの低下

を同時に実現し、結果として「新規フロート獲得コストの構造的低下（実質的なマイナス金利化）」をもたらし得る。

●ペット保険におけるフロートの特性

ペット保険は年払い・月払いであり、単純なフロート期間自体は短い。しかし、

- ・地震保険等に見られるような広域同時多発リスクが存在せず
- ・ペティロス（小口・高頻度損失）の集合体であるため、保険金支払い時期の分散効果が極めて大きい
- ・継続率が高く、将来キャッシュフローの予測可能性が高い

という構造を有している。これは「短期でありますながら、時間的に滑らかで崩れにくいフロート」という、他の損害保険には見られない特性に繋がっている。

以上より、ペット保険においては、フロートの「期間・量・質」をさらに強化する施策を、意図的かつ構造的に講じることが重要である。

それは単なる運用の高度化ではなく、保険を「金融商品」ではなく、「生物学的・行動学的システム」として設計する行為に等しい。

フロートは与えられるものではない。

予防・医療・行動変容を通じて「設計し獲得し続ける」ものである。

第一部 ペット保険の成長性と構造化リスクへの対処 ～「保険の保険」～について

1. ペット保険の成長性について
2. 構造的リスクへの対処の必要性
3. 「保険の保険」の実装状況について

第二部 さらなる収益拡大に向けて ～ペットにおける新たな生活習慣病への対応～

1. 保険金支払いにさらなる健全化余地がある ～原因未定での保険金支払いの状況～
2. 若齢における加齢性疾患発症の状況
3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り
4. 「保険の保険」の実装に向けて ～当たり前のことを当たり前に～

第一部

ペット保険の成長性と構造化リスクへの対処 ～「保険の保険」～について



CO anicom®

※本資料は、当社の現時点における分析・仮説・問題意識を整理したものであり、将来的な業績や効果を保証するものではありません。



ペットと私たちの関係について ～ペットに対する本質的需要について～

科学技術の進化は生活を豊かにする一方で、
人と人との接点が希薄化しやすい側面も指摘されている。

ペットは人々に無償の愛と情緒的な安定をもたらし、「我々の心の発電所」として
社会構造的に機能している側面がある。

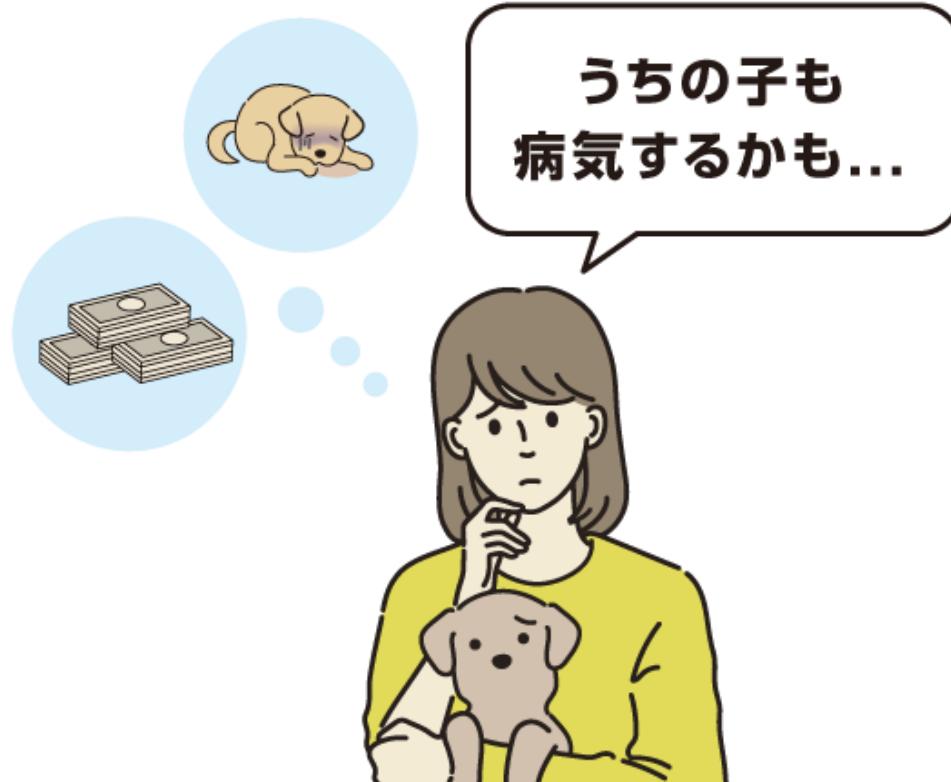
現代社会が抱える様々な不安と、いわば逆相関的に存在するペット需要の強さこそが、
景気変動下でもペット関連支出が底堅い構造的要因と考えられ、投資における
有効なポートフォリオの構成要素としても機能し得る可能性がある。

一方で、ペット医療においても医療費上昇という構造リスクへの対処が必要となっており、
本資料の主題であると同時に、当社グループが取り組むべき構造的課題であると認識している。

1. ペット保険の成長性について

(1) 需要は堅調

① ペット保険の需要＝「将来における医療費負担の不安」



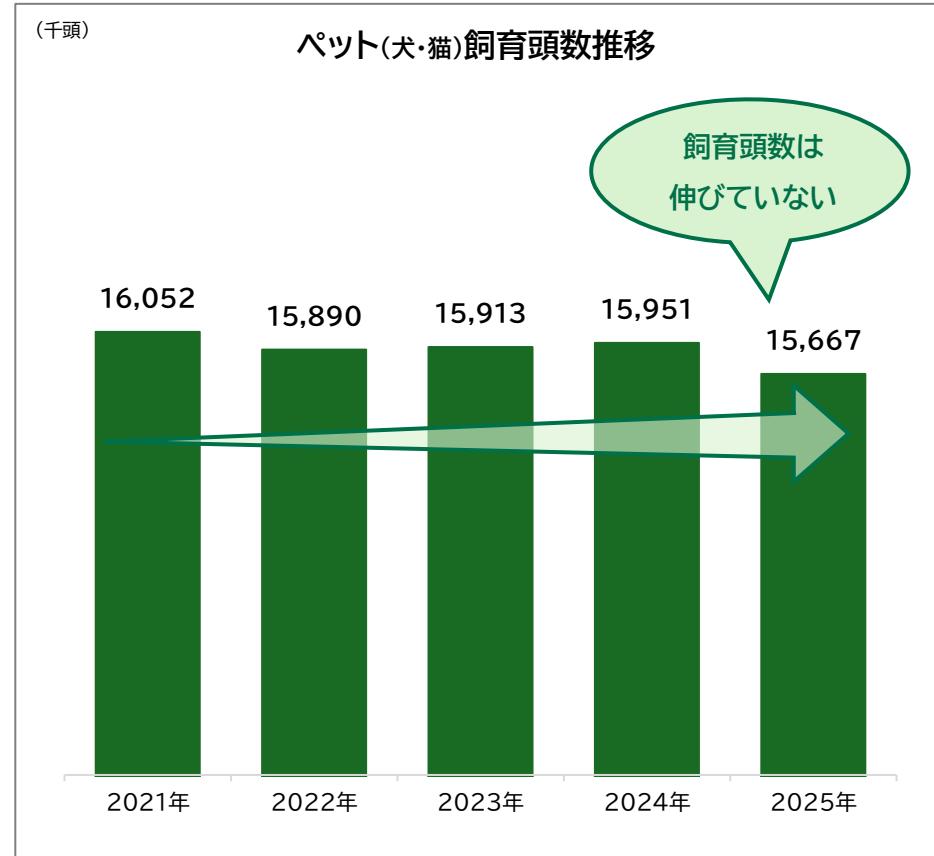
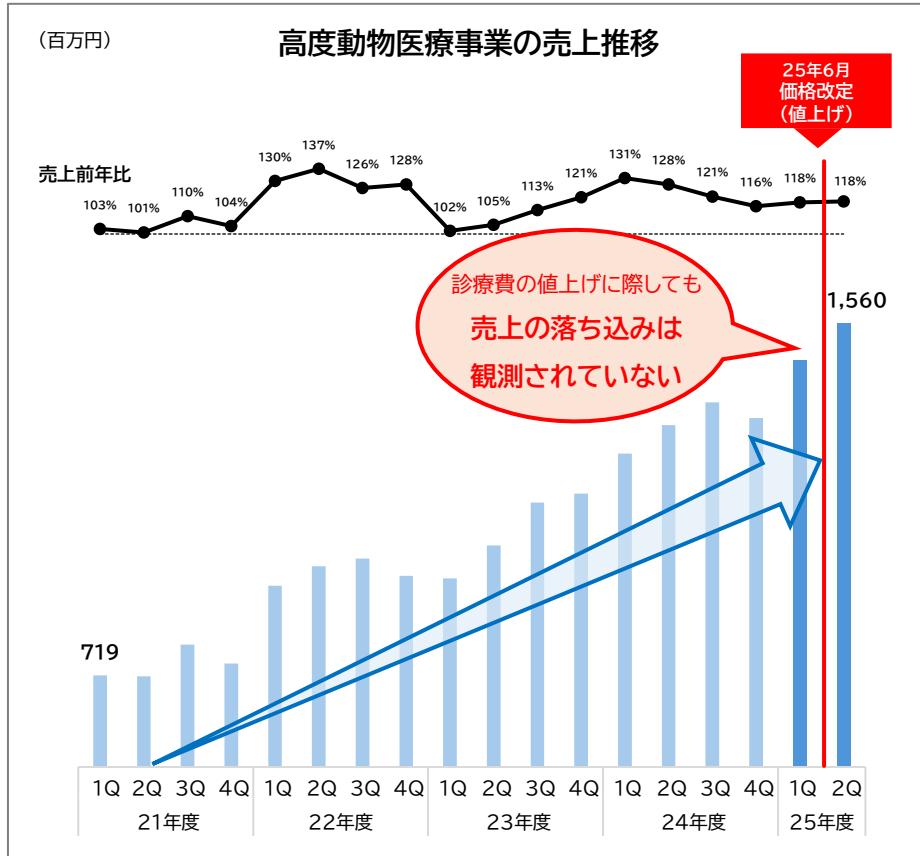
保険ニーズは、将来の医療費不安です。
したがって、保険の需要は医療費の伸びによって代替しうる。

1. ペット保険の成長性について



(1) 需要は堅調

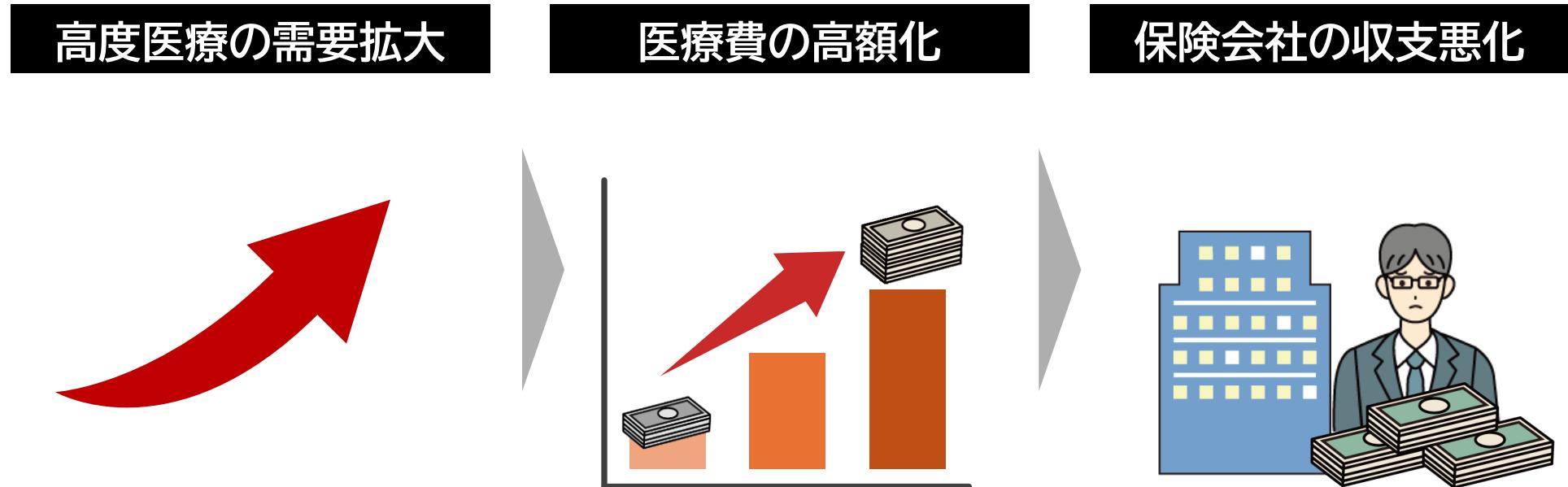
②高度動物医療の需要は順調



1. ペット保険の成長性について

(1) 需要は堅調

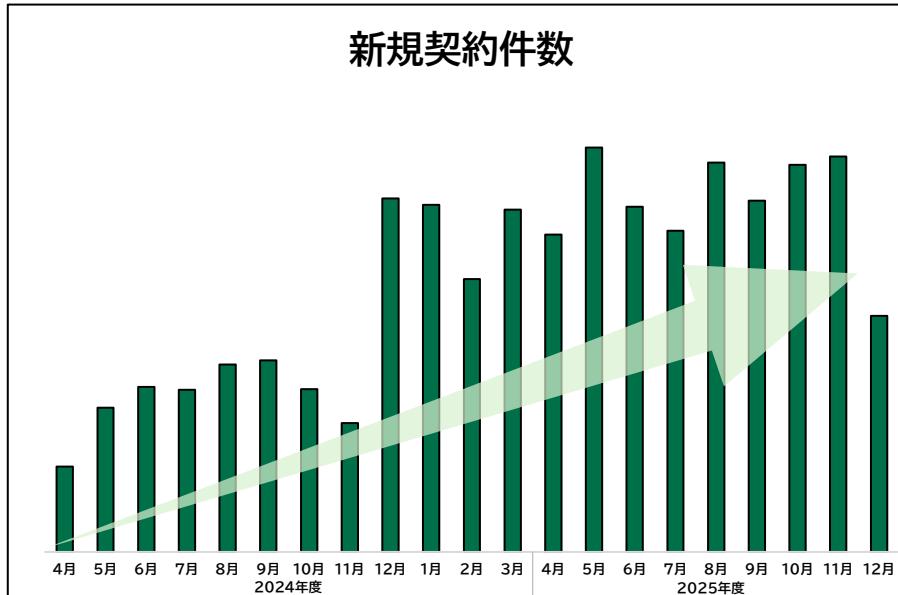
③しかし、高度医療は医療費の高額に繋がり、ペット保険の収支悪化の構造的リスクでもある



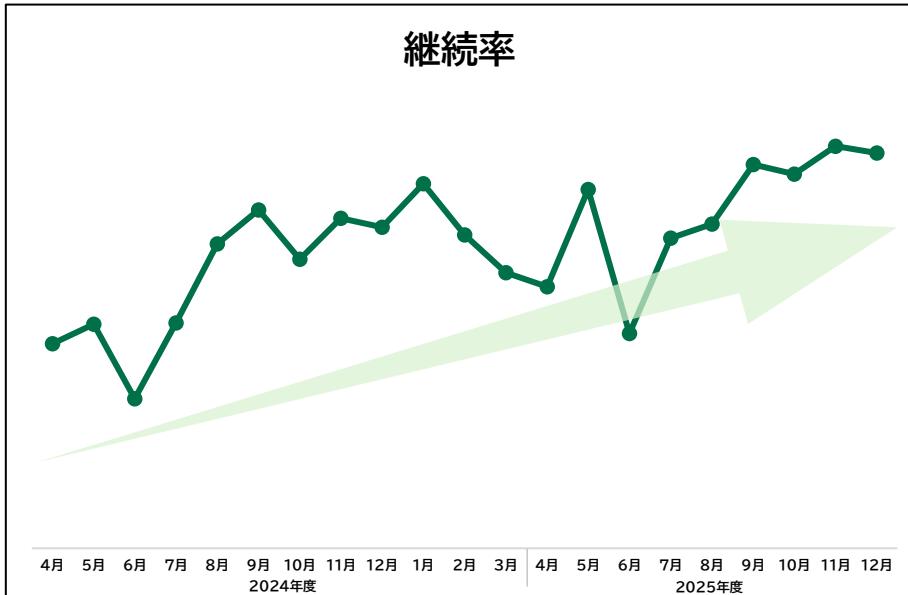
1. ペット保険の成長性について



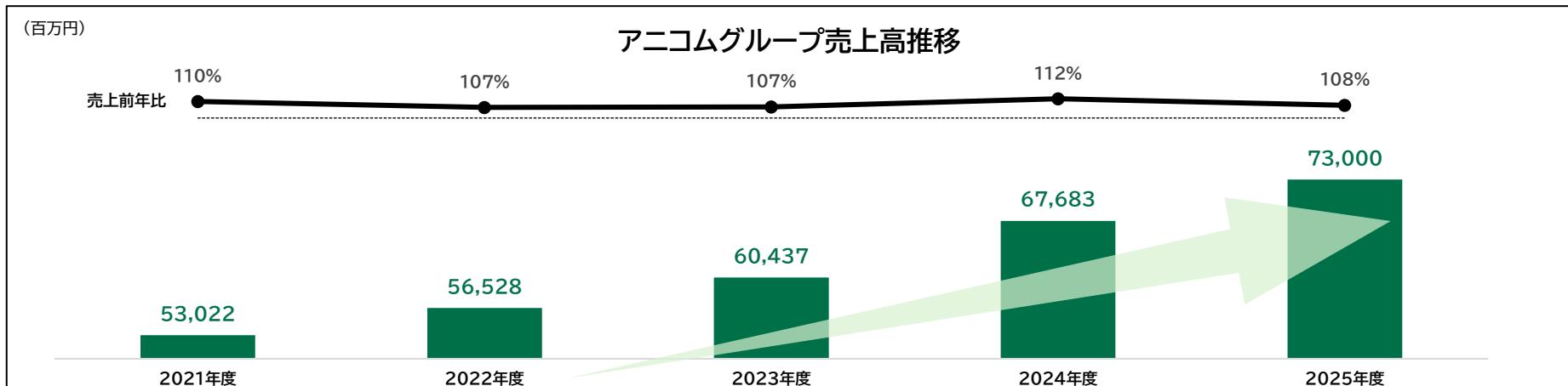
(2) アニコム損保の状況(新規・継続)



※2024年4月～2025年12月の期間において新規契約締結した犬および猫の当社保険契約数推移
※契約取消となった契約は除く



※2023年4月～2024年12月の期間において契約締結または契約更新された犬および猫における当社保険契約のうち、
2024年4月～2025年12月の期間において契約更新がなされた契約数を継続率としている。

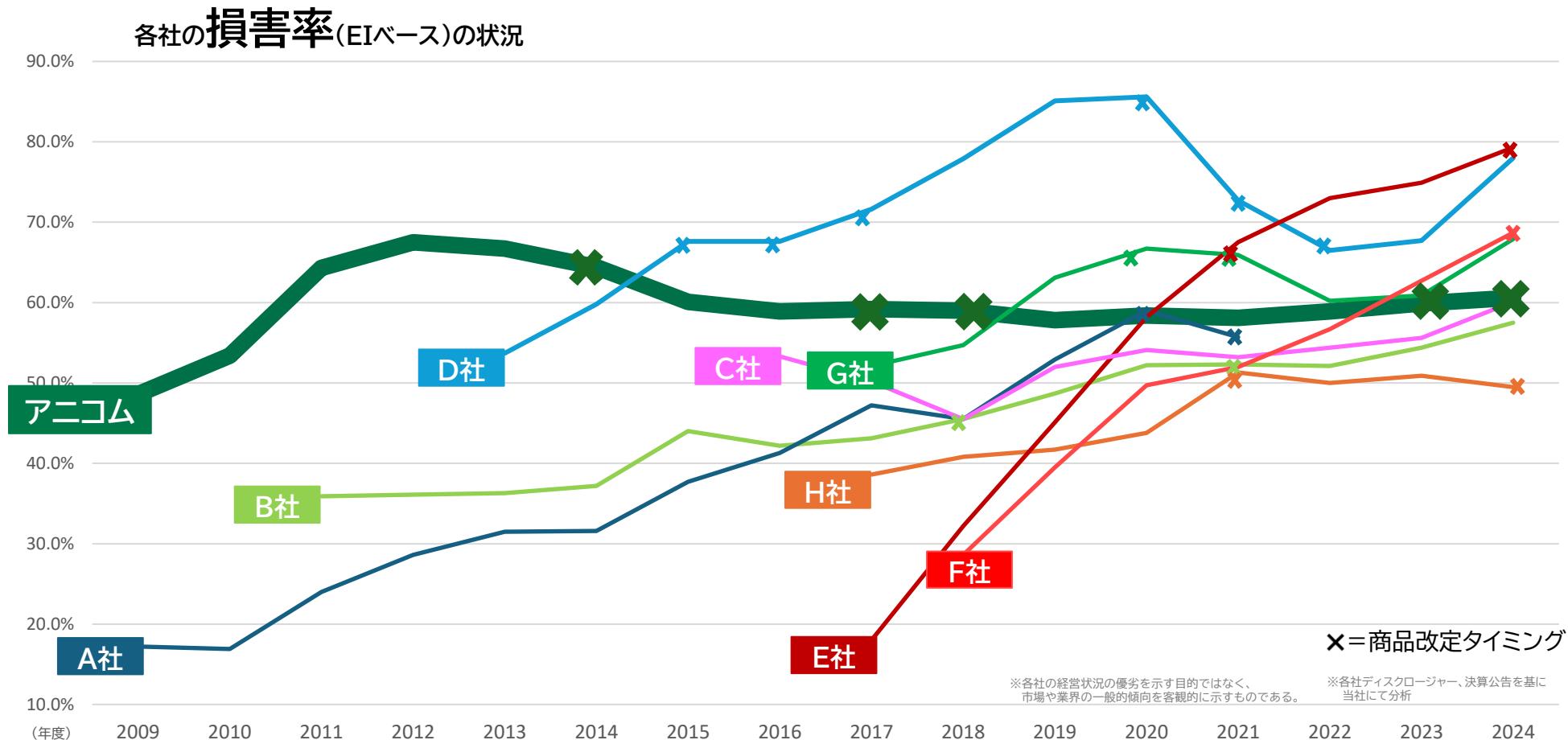


1. ペット保険の成長性について



(3)競合他社の状況等

①参入直後から、ほぼすべての競合社において収支悪化の傾向 → 構造的課題の可能性

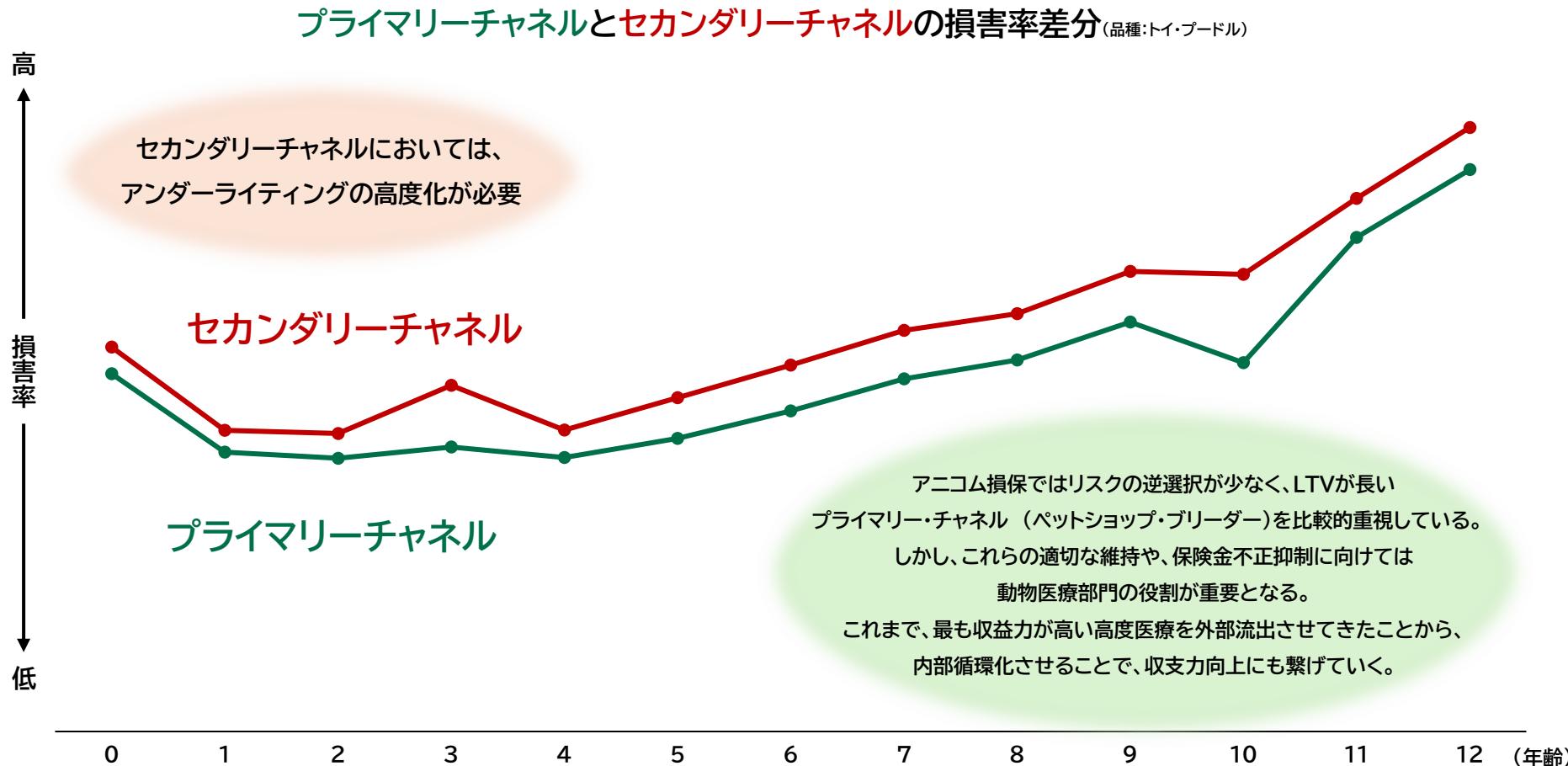


1. ペット保険の成長性について



(3)競合他社の状況等

- ②セカンダリー・チャネルは、既にリスクを高度に感じている方の加入が多くなり易い
→ リスクの逆選択に繋がり易い



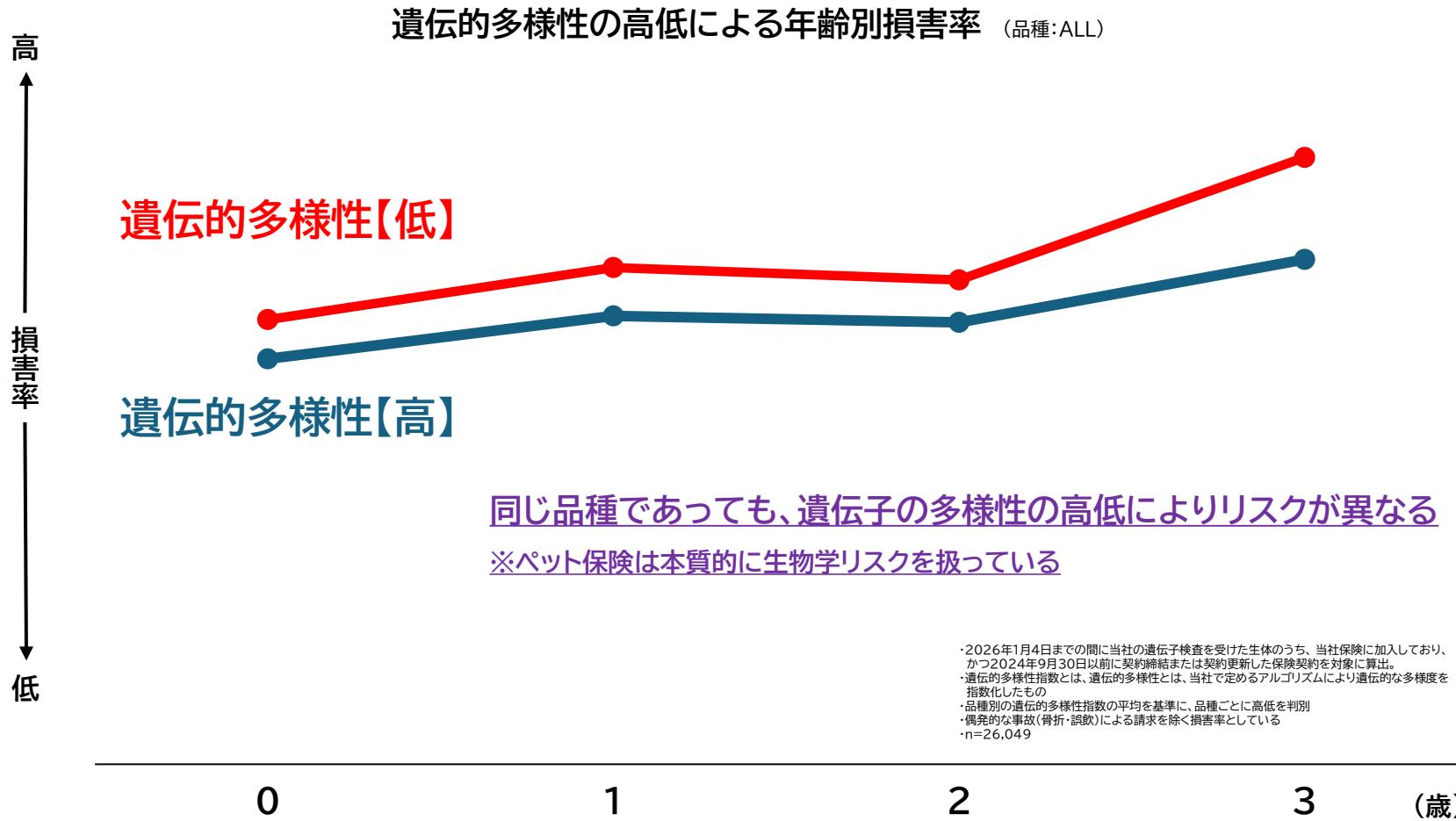
※2023年11月1日～2024年10月31日に契約締結または契約更新された当社保険契約のデータにて算出

1. ペット保険の成長性について



(3)競合他社の状況等

③保険引き受けはリスクに応じて行わなければならない



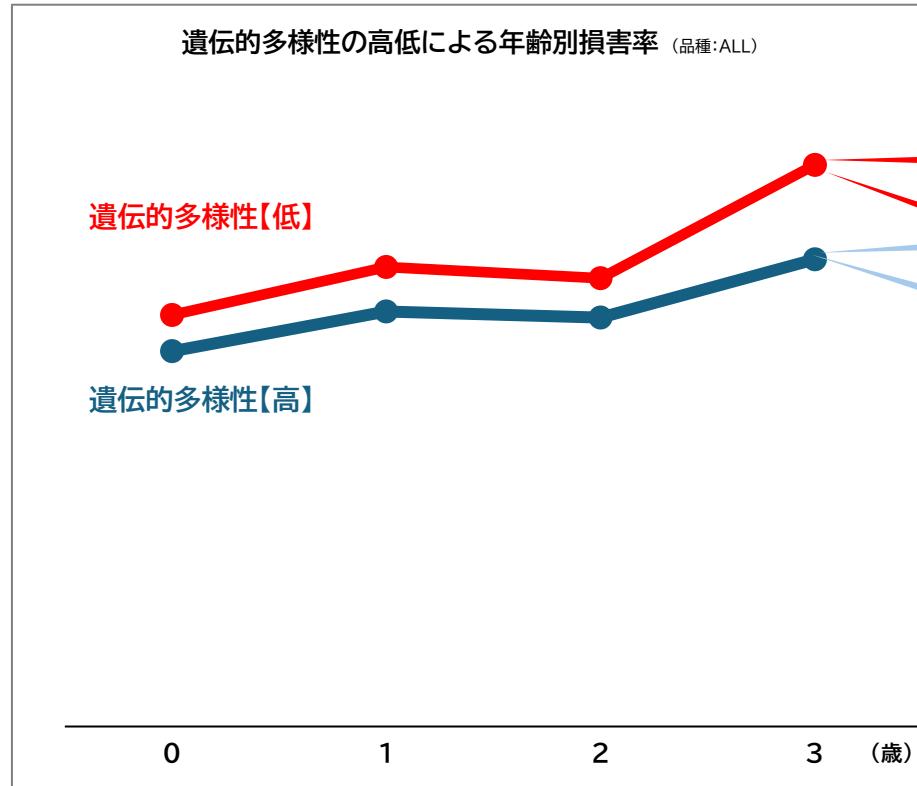
1. ペット保険の成長性について



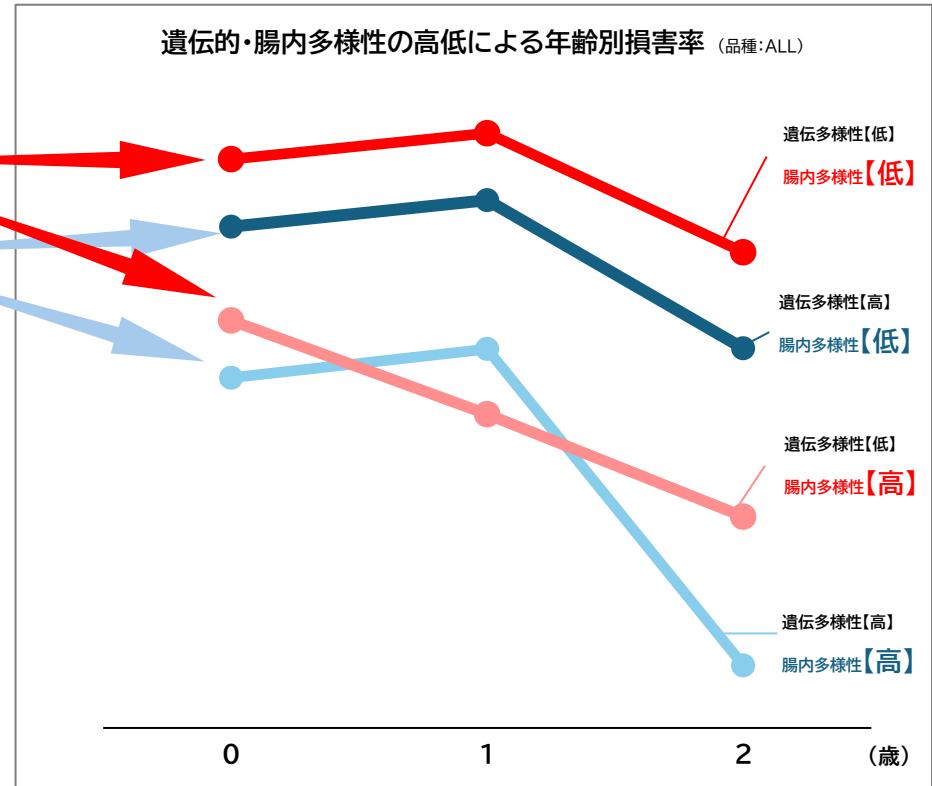
(3)競合他社の状況等

④運命(遺伝子の多様性)によるリスクも、日常生活の努力で変えられる可能性がある

<遺伝(=運命)の違いによる損害率差分>



<腸内多様性の違いによる損害率差分>



・2026年1月4日までの間に当社の遺伝子検査を受けた生体のうち、当社保険に加入しており、かつ2024年9月30日以前に契約締結または契約更新した保険契約を対象に算出。
・遺伝的多様性指数とは、遺伝的多様性とは、当社で定めるアルゴリズムにより遺伝的な多様度を指數化したもの
・品種別の遺伝的多様性指数の平均を基準に、品種ごとに高低を判別
・偶発的な事故(骨折・誤飲)による請求を除く損害率としている
・n=26,049

・2026年1月4日までの間に当社の遺伝子検査を受けた生体のうち、当社保険に加入しており、かつ2024年9月30日以前に契約締結または契約更新した保険契約において、腸内細菌叢検査を受けた対象に算出。
・遺伝的多様性とは、当社で定めるアルゴリズムにより遺伝的な多様度を指數化したもの
・腸内多様性とは、当社で定めるアルゴリズムにより腸内細菌叢の多様度を指數化したもの
・遺伝的多様性・腸内多様性ともに品種別の指数平均を基準に、品種ごとに高低を判別
・偶発的な事故(骨折・誤飲)による請求を除く損害率としている
・n=4,347

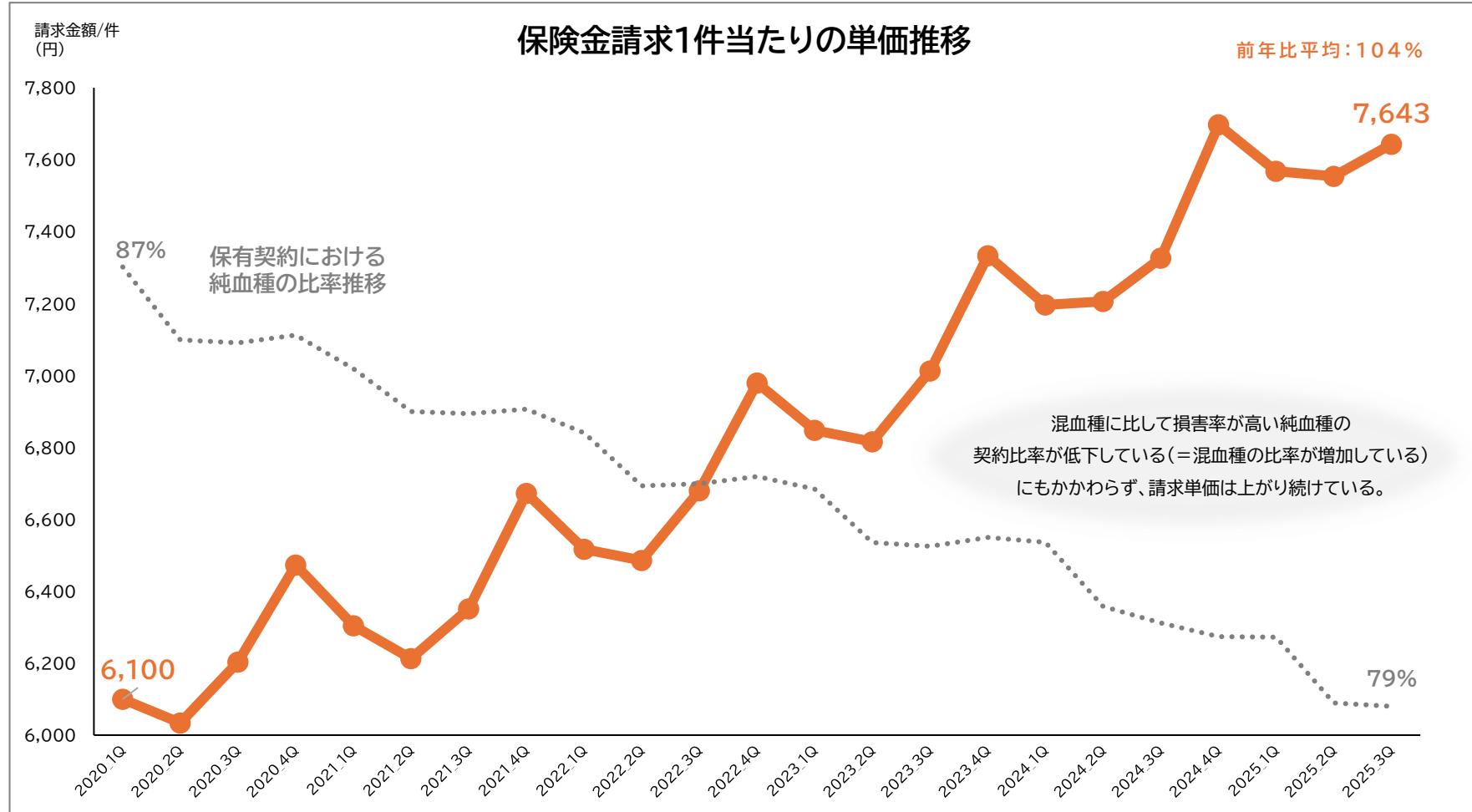
※遺伝的要因に加え、体质や生活環境等、複数の要因が関与する可能性があります。

2. 構造的リスクへの対処の必要性

(1) アニコム損保における収支に影響を与えるリスクの状況

① 医療費は年々上昇している

種別・支払割合・年齢・通院入院手術 全て合算



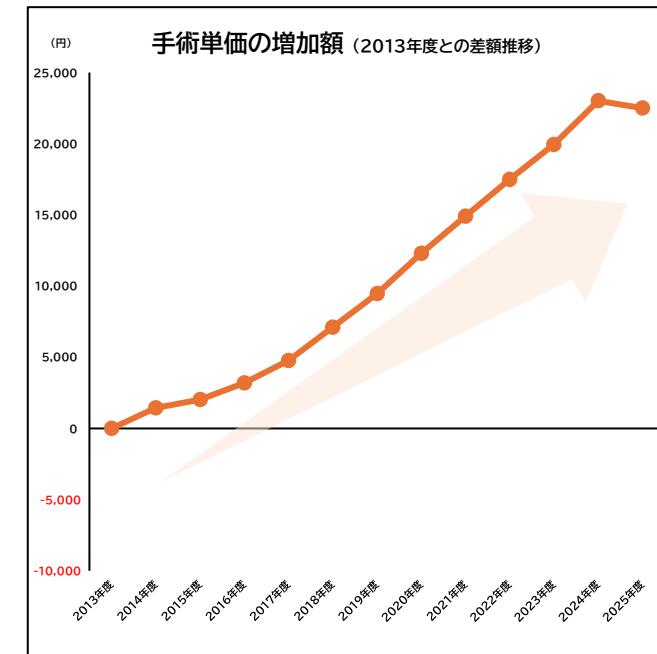
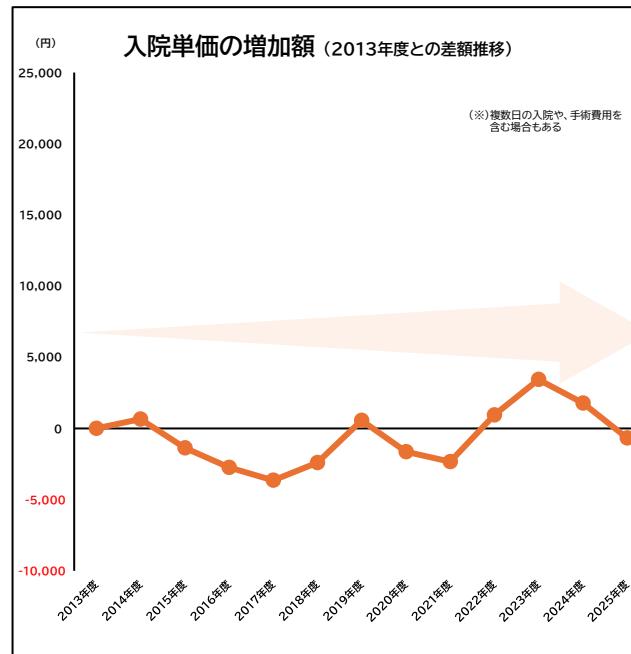
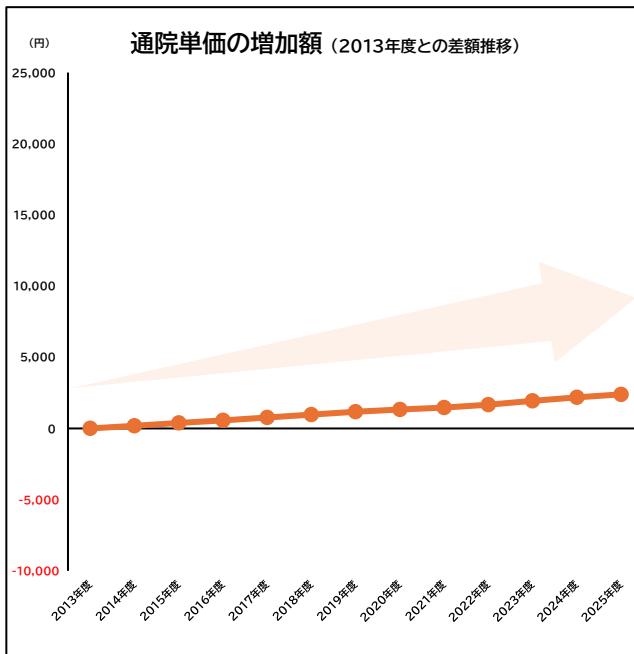
2. 構造的リスクへの対処の必要性



(1) アニコム損保における収支に影響を与えるリスクの状況

②高度医療はリスク増加につながり得る

(i) 通院・入院・手術費用の単価の推移



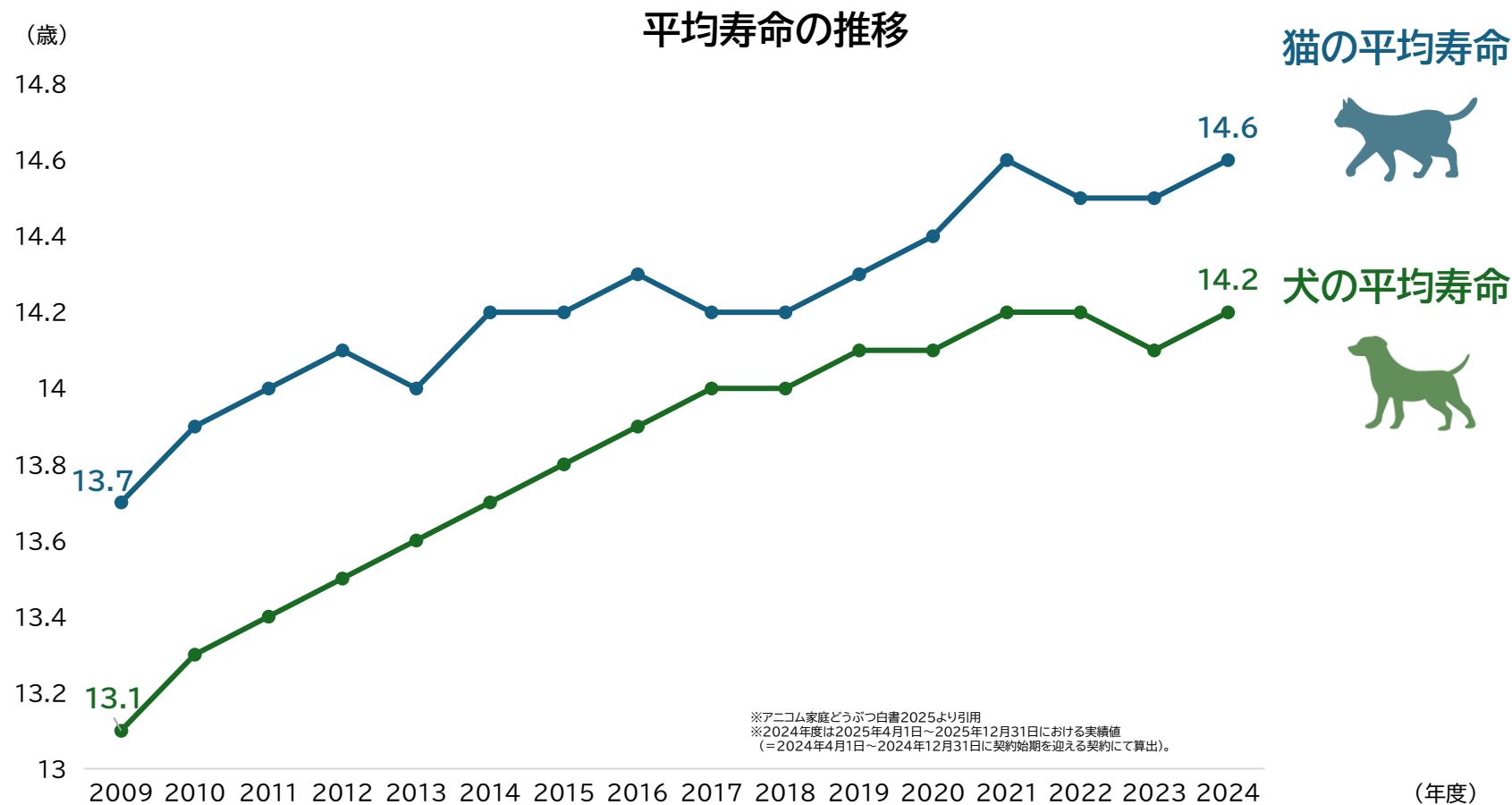
2. 構造的リスクへの対処の必要性



(1) アニコム損保における収支に影響を与えるリスクの状況

②高度医療はリスク増加につながり得る

(ii) 寿命は伸びている



2. 構造的リスクへの対処の必要性



(1) アニコム損保における収支に影響を与えるリスクの状況

②高度医療はリスク増加につながり得る

(iii)長寿は医療費増加リスクに繋がり得る

診療費(円)

年齢別の年間平均診察費(1頭あたり)

※請求のあった契約のみにて算出

300,000

250,000

200,000

150,000

100,000

50,000

0

Copyright © Anicom Holdings, Inc. All Rights Reserved

犬の平均診療費



猫の平均診療費



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

年齢

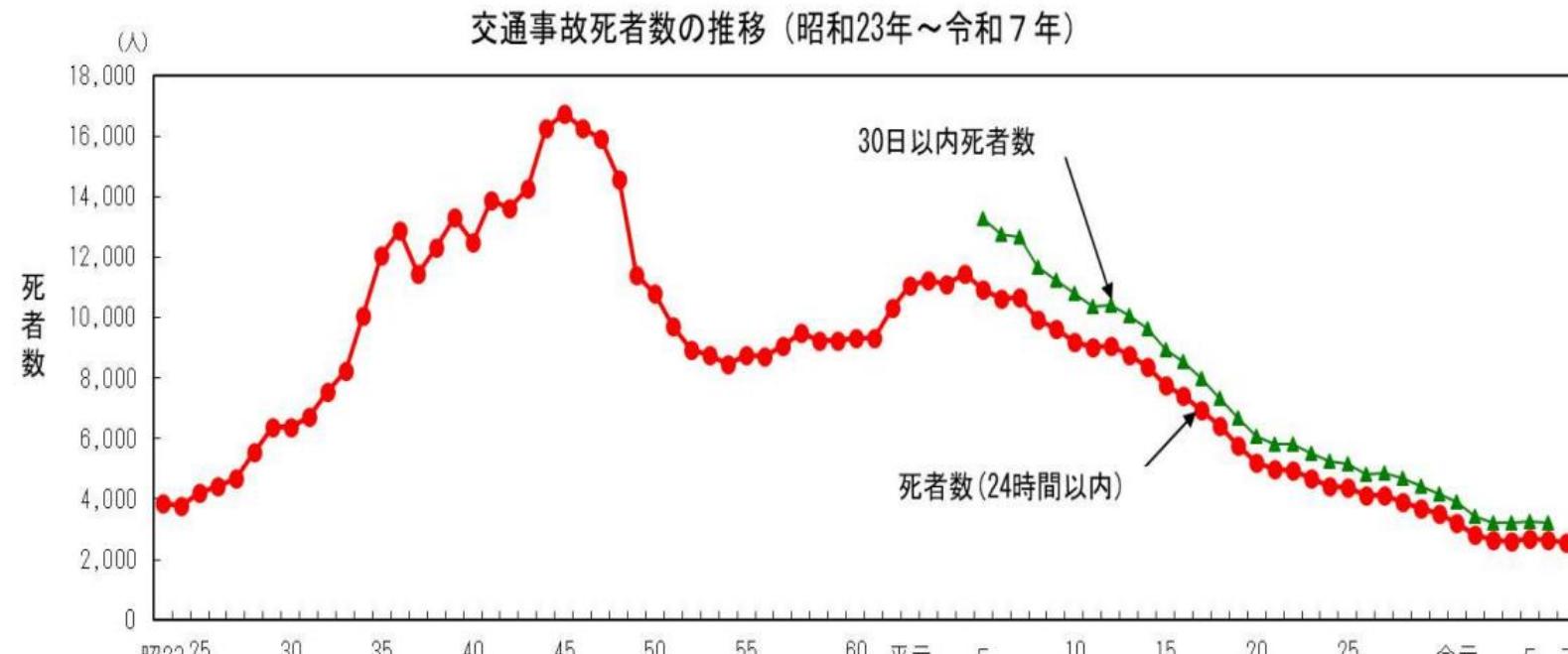
※アニコム家庭どうぶつ白書2025より引用

2. 構造的リスクへの対処の必要性

(2) 科学技術の進化とリスクとの関係

- ①多くの保険種目において科学技術の進化はリスク減少に寄与

地震保険における耐震性向上、自動車・航空機保険における操縦安定性の向上等



注 昭和46年以前は沖縄県を含まない。

総務省・警察庁『道路の交通に関する統計 令和7年中の交通事故死者について』令和7年(2025年)統計, 政府統計の総合窓口(e-Stat)

2. 構造的リスクへの対処の必要性

(2) 科学技術の進化とリスクとの関係

② 医療保険においては、科学技術の進化はリスク増加に寄与する可能性



(i) 科学技術の進化は、治せる疾患を増やし、長寿化を推進



(ii) 長寿化は、さらなる治療難度の高い疾患の増加へ



(iii) 結果的に、医療費を構造的に増加させ得る可能性がある

* ペットの寿命はヒトの5~10分の1であり、医療技術進化を受けた構造的医療費増加リスクが
先にヒットする可能性があり、対応が重要である。

2. 構造的リスクへの対処の必要性

(3) 医療保険は、高度医療に対応せざる得ない

①対象外化

医療保険ニーズに反する

②保険料引き上げ

さらなる逆選択に繋がるリスクがある

(4) そもそも、医療保険は、医療があって初めて存在する



①保険と医療の分断こそが構造的原因

②高度動物医療自体もブランド化・機械化・標準化・AI化し、内部循環化することで、ペット保険に対する実体的ヘッジとする。

2. 構造的リスクへの対処の必要性

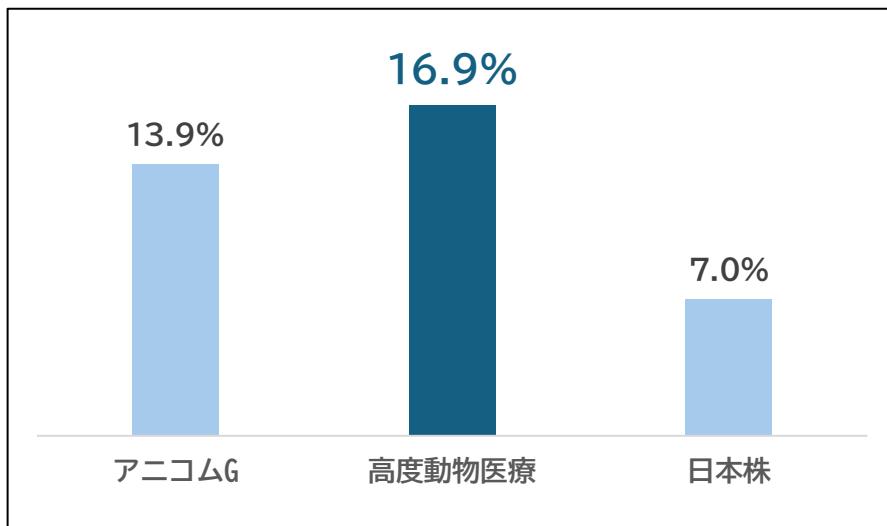


(5) ポートフォリオとしての有効性について

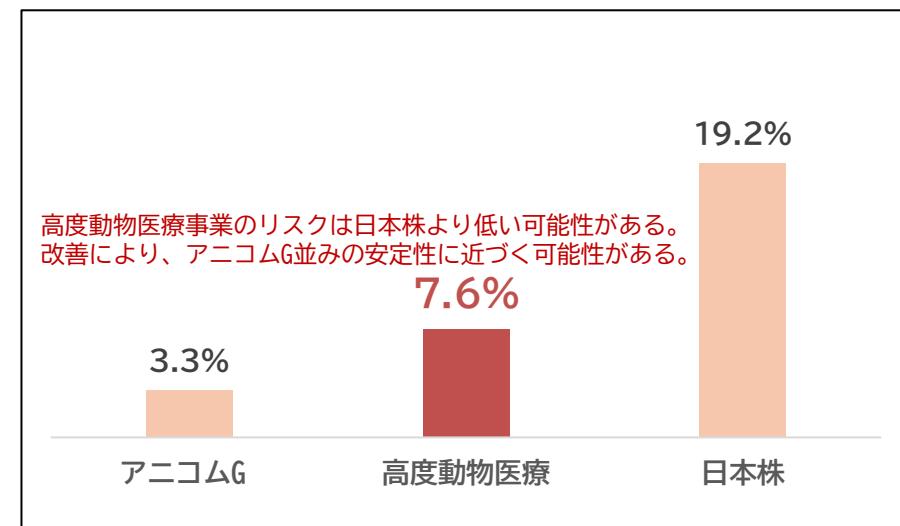
※当該期待値等の分析は一定の仮定・前提条件に基づくものであり、条件の設定により数値が変動し得ます。また、本分析結果は、リスク分散の可能性を示唆するものであり、単独での収益性や施策の有効性を直ちに断定する趣旨のものではありません。

①先行の高度動物医療事業者を参考に、 μ 「期待値（収益性等）」・ σ 「リスク」・ ρ 「ペット保険との相関性」を見たところ、
アニコムグループよりも、 μ は高いが、 σ は比較的低く、 ρ は低い。 → 事業ポートフォリオとしても有効である可能性が高い。

(i) 期待値(μ): ROEによる事業収益性の評価



(ii) リスク(σ): ROEの標準偏差



(iii) リスク相関係数(ρ): 0.14

②高度動物医療は、「保険の保険」となり得る可能性

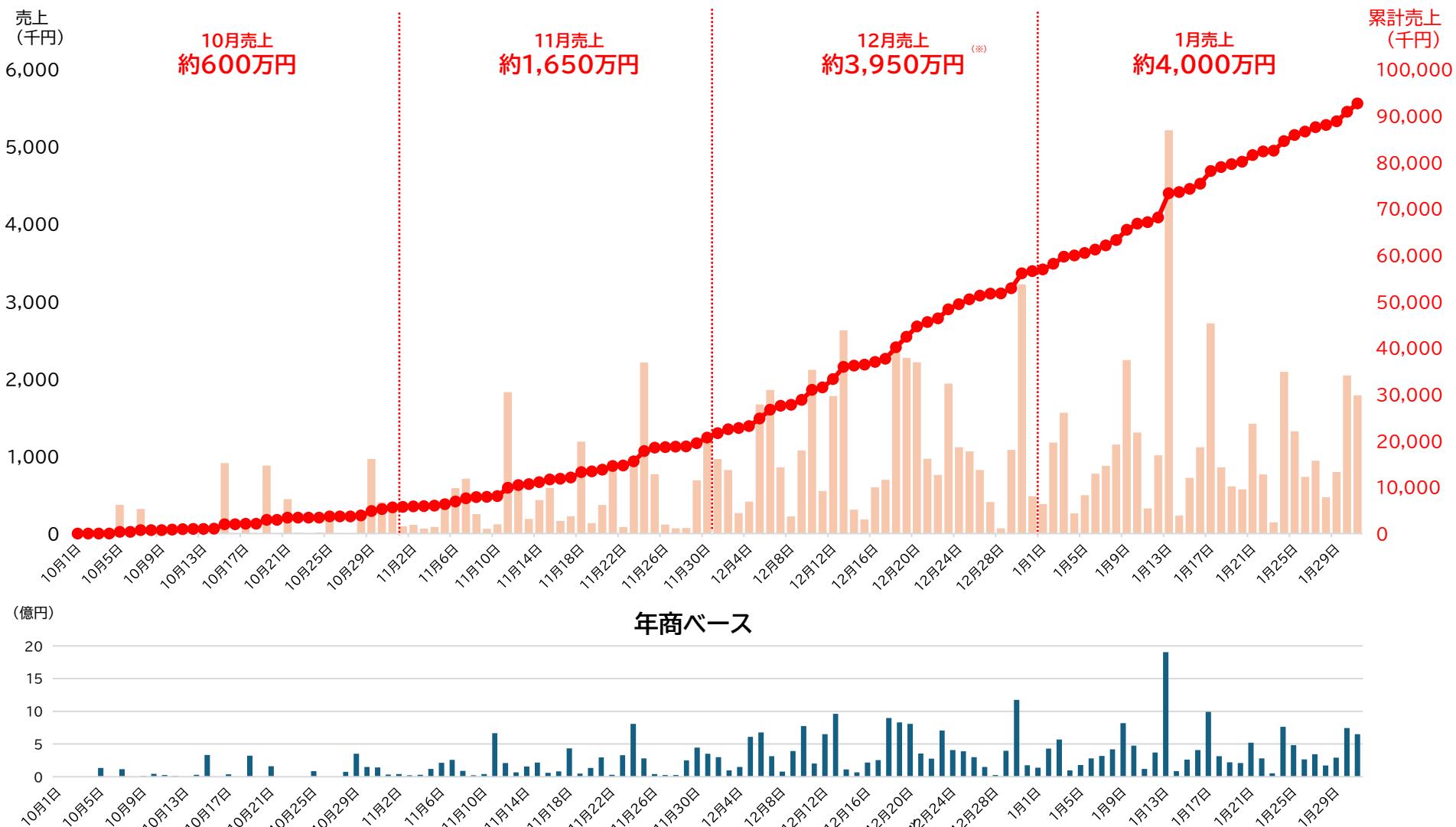
高度動物医療の取り組みは、単なる内製化や事業多角化ではなく、ペット保険に内在する高額医療費リスクを外部に流出させず、内部循環となり得て、実体的ヘッジ「保険の保険」として機能する可能性がある。

*自動車・航空機保険においては、既に、自動運転によりリスク自身が変容し、その対応が急がれている。当然に、医療保険においても、手術等の自動化によりリスクの変容が見込まれている。

3. 「保険の保険」の実装状況について



(1) 売上の状況

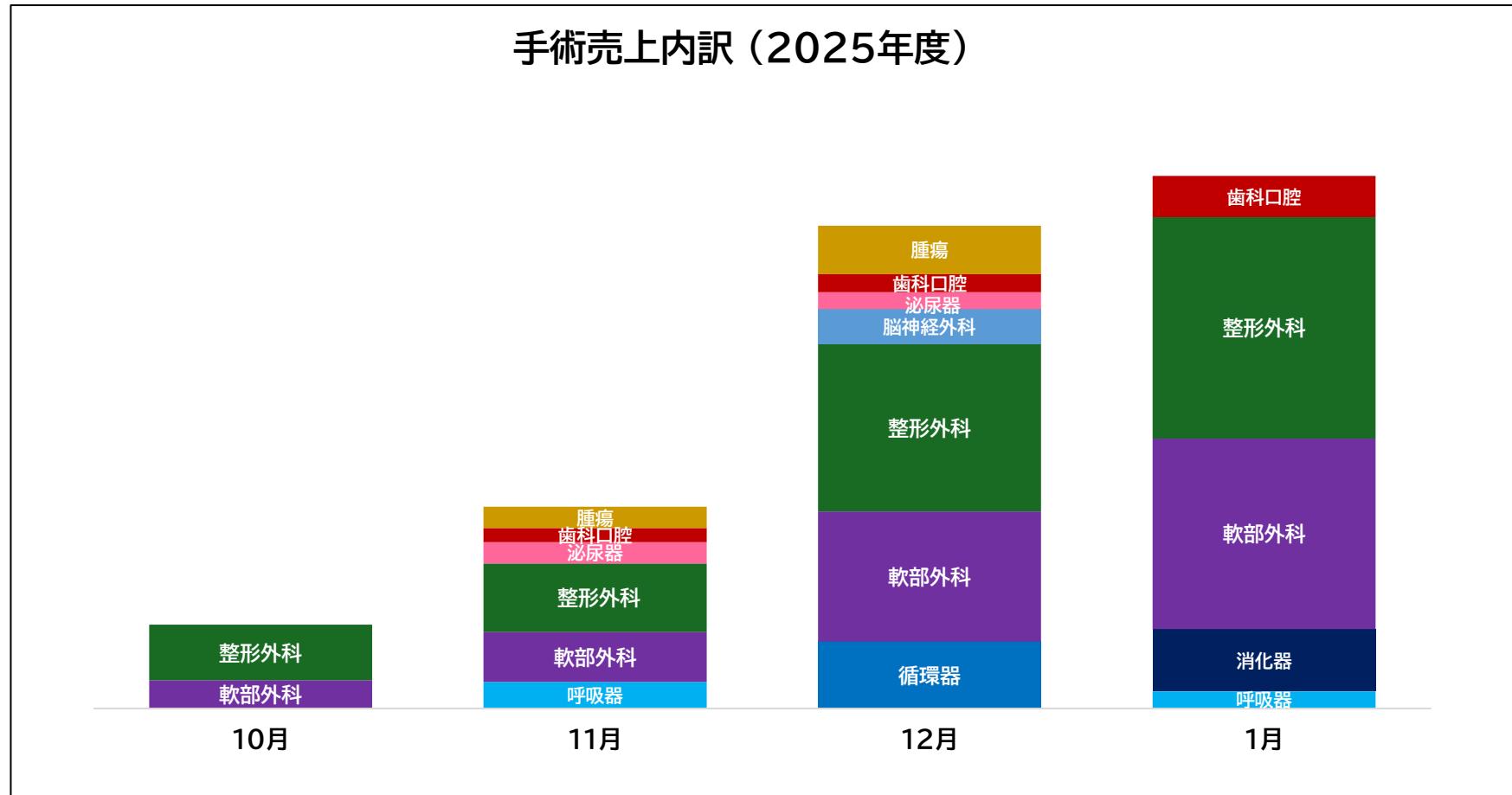


3. 「保険の保険」の実装状況について



(2) 診療科・地域分散・来院ルートの状況

①診療科目分散



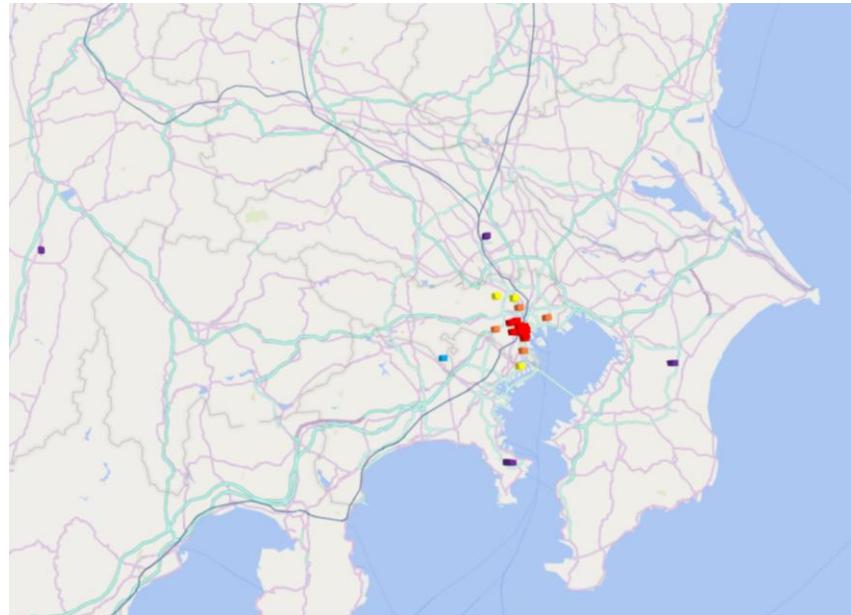
3. 「保険の保険」の実装状況について



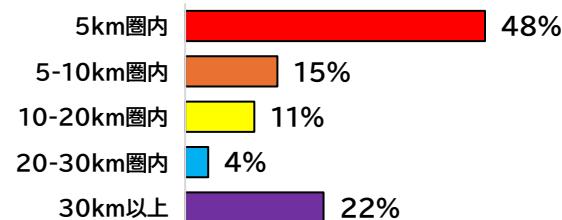
(2) 診療科・地域分散・来院ルートの状況

②地域分散

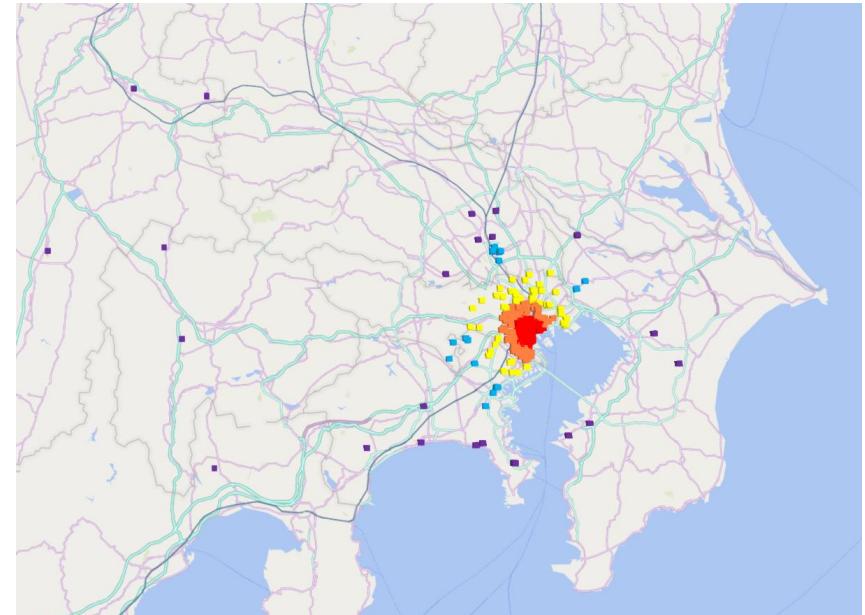
2025年10月31日時点（開業月）



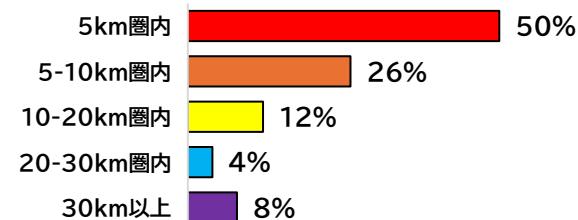
2025年10月時点



2026年1月31日時点



2026年1月時点

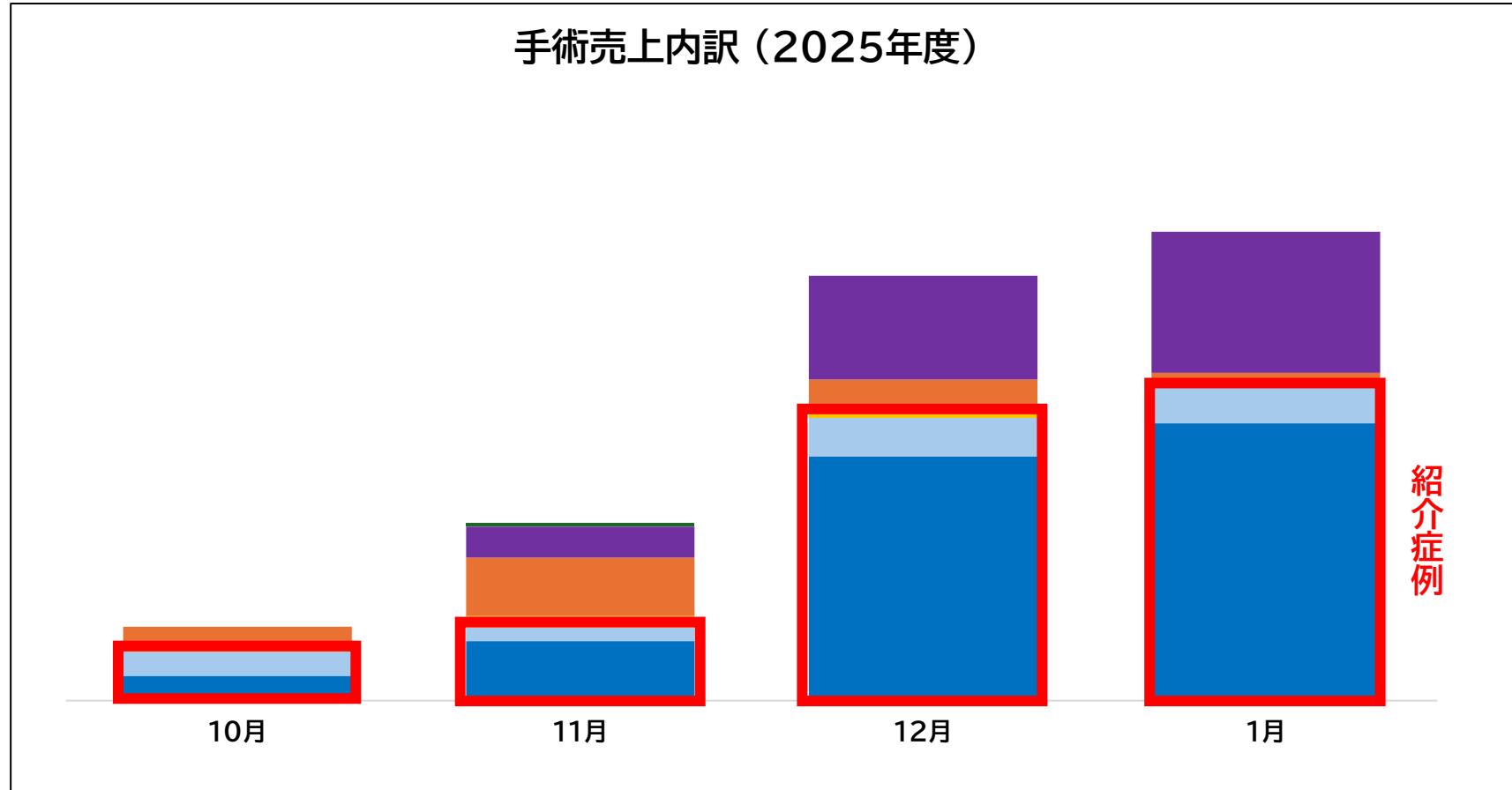


● ……顧客居住地

3. 「保険の保険」の実装状況について

(2) 診療科・地域分散・来院ルートの状況

③来院ルート



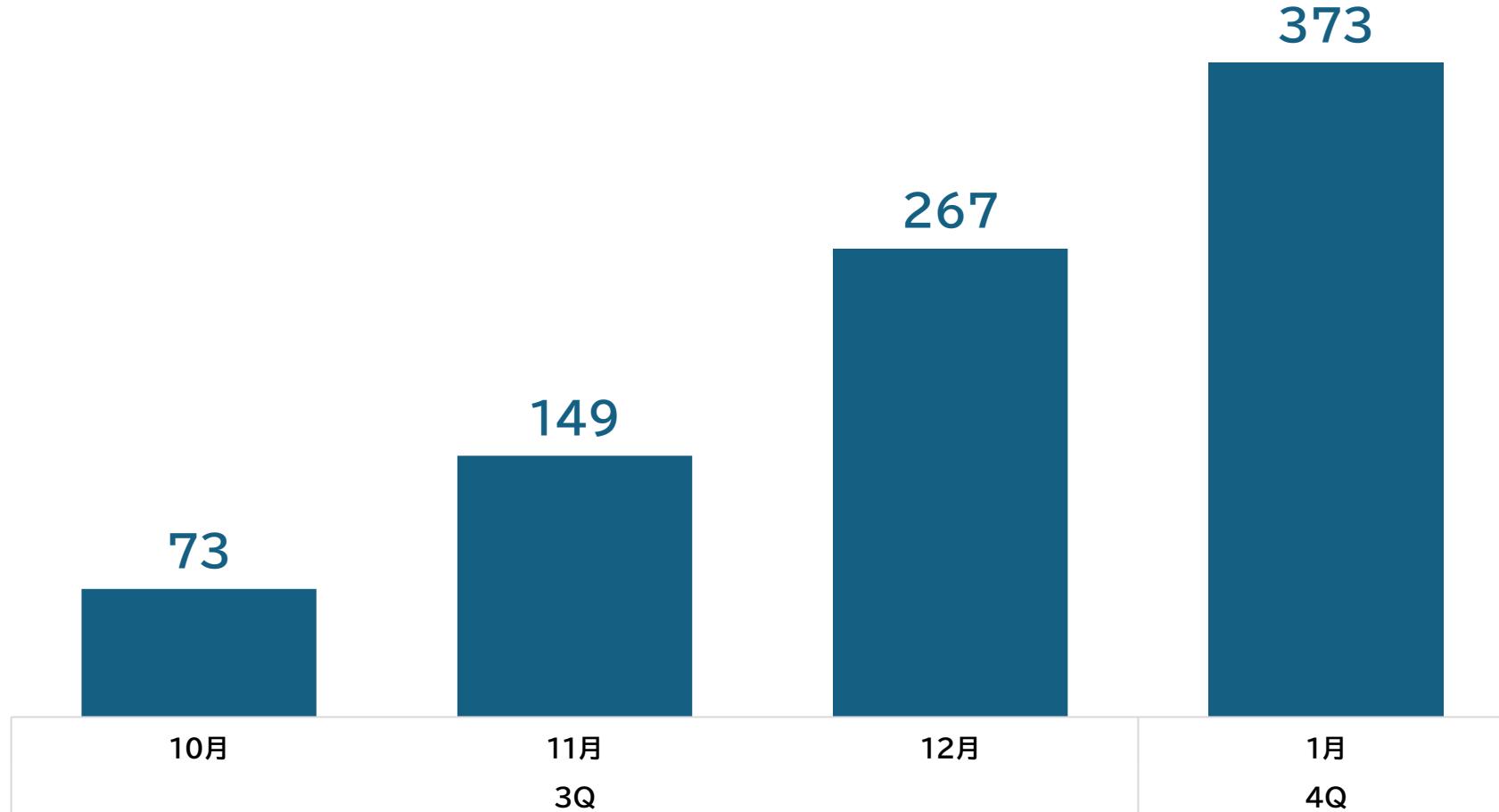
長期服薬は保険財政を悪化させるがそれから高度医療への送患促進は
契約者満足度・保険収支の良化双方に資する

3. 「保険の保険」の実装状況について



(3) 提携病院の拡大の状況

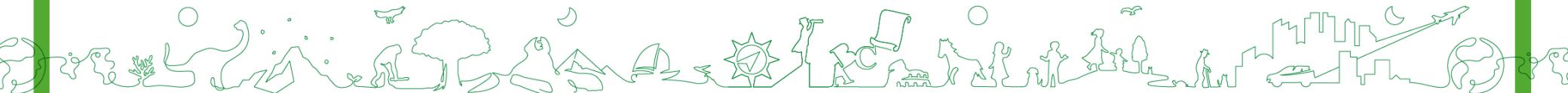
JARVIS Tokyo 提携病院数推移



提携病院……地域医療を担う動物病院様のうち、JARVIS どうぶつ医療センターTokyoが設ける提携動物病院制度に基づき、同センターと連携し、高度かつ専門的な動物医療の提供を行う動物医療機関様

第二部

さらなる収益拡大に向けて ～ ペットにおける新たな生活習慣病への対応 ～



CO anicom®

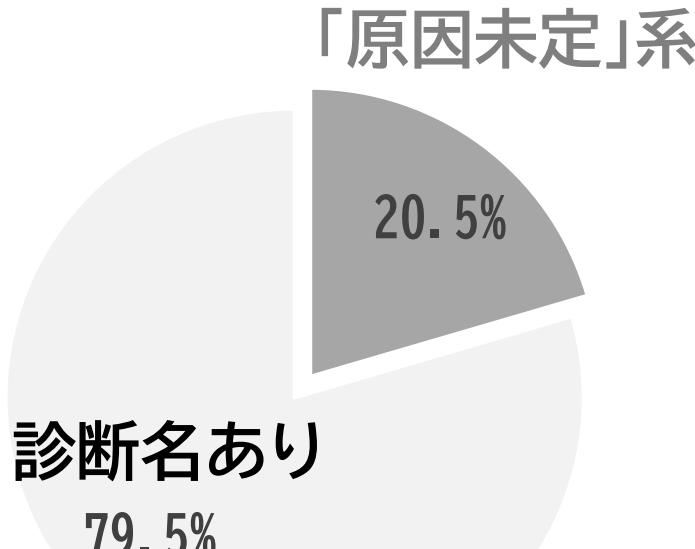
※本章は、当社データ等に基づく分析・示唆を整理したものです、医学的因果関係や効果を確定的に示すものではありません。

1. 保険金支払いにさらなる健全化余地がある ～原因未定での保険金支払いの状況～

anicom



【犬】



長期にわたる「原因未定」での保険金支払いは
極論すれば、「使途不明金」と取られかねない
可能性がある。

原因未定の内訳

疾患名	請求頭数	保険金占率
嘔吐 下痢 血便 原因未定	122,866	5.3%
胃炎 胃腸炎 腸炎	80,173	3.8%
原因未定の外耳炎	66,795	2.2%
皮膚の痒み 原因未定	23,025	1.4%
元気喪失 食欲不振含む 原因未定	24,198	1.3%
肝酵素上昇 原因未定	11,147	1.1%
歩行異常 跛行 四肢の痛み 原因未定	30,922	1.1%
痙攣発作 原因未定	7,108	0.8%
発咳 原因未定	14,747	0.8%
肺水腫 原因未定	1,882	0.4%
疼痛 原因未定	9,801	0.3%
腰痛 原因未定	6,196	0.2%
耳の痒み 原因未定	9,669	0.2%
尿の性状異常 原因未定	4,627	0.2%
貧血 原因未定	1,271	0.2%
脱毛 原因未定	3,866	0.2%
発熱 原因未定	1,994	0.1%
くしゃみ 鼻汁 原因未定	3,915	0.1%
多飲多尿 原因未定	2,622	0.1%
麻痺 原因未定	1,126	0.1%
目やに 原因未定	5,250	0.1%
ふるえ・振戦 原因未定	2,127	0.1%
胸水 血胸 膽胸 乳び胸含む 原因未定	303	0.1%
斜頸 原因未定	712	0.1%
削瘦 体重減少 原因未定	1,284	0.0%
腹痛 痢痛 原因未定	1,314	0.0%
失神および虚脱 原因未定	477	0.0%
鼻出血 原因未定	340	0.0%
脱水 原因未定	391	0.0%
ショック症状 原因未定	266	0.0%
目の痒み 原因未定	531	0.0%
原因未定の皮膚炎	6	0.0%

2. 若齢における加齢性疾患発症の状況



加齢性疾患_(※)有病率推移

(※)以下の5疾患
弁膜症・慢性腎臓病・腫瘍性疾患・胆泥症・脾炎

「原因未定の疾患が多い&若齢から加齢性疾患が多い」
→これらは、純血に見られがちとされ、遺伝要因として
認識されてきたが、混血でも同様の状況である
→ 免疫不全・疲弊があり得る可能性がある

純血

混血

0歳から発症

1.6%
1.3%

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

(年齢)

2023年11月1日～2024年10月31日の期間において契約締結または契約更新された犬および猫における当社保険契約を基に算出

3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(1)ヒトとペットでは免疫成熟環境に非対称性がある

①多様な食べ物を食べ、外出するヒト VS 単調な食べ物を食べ、外出が少ないペット

ヒト



ペット



多様な食事・多様な外出

体調が悪ければ、休む・食を変える等、
不定愁訴状態において**自分で調整することができる**

単調な食事・少ない外出

体調が悪くても、**自分で調整することができない**

3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り

(2)ペットにおいて、単調な食習慣が免疫の未成熟となっている可能性

①ワクチン…で敵(×)を覚えているのは



- **不正規ルート**(口からではない)
- **炎症反応**

→敵(×)と識別し、記憶されやすい(ワクチンは、痛い・腫れことが多い)

②食べ物は？



- **正規ルート**
- **炎症なし**

→自分自身では無いが、必要なもの・味方として、許容すべきものとして○として、識別・記憶されるようになる。

しかし、食べ物であっても、**不正規ルート(傷口等)**からであると



- **炎症**とともに認識されるので、敵(×)と識別・記憶されると、**食物アルレギー**に…
- ×とされなくとも、いつも食べているもの(○)でない場合
 - 免疫は常時監視を余儀なくされる
 - 貴重な免疫リソースを費消
 - がん等が発生しても、対処できなくなる可能性がある

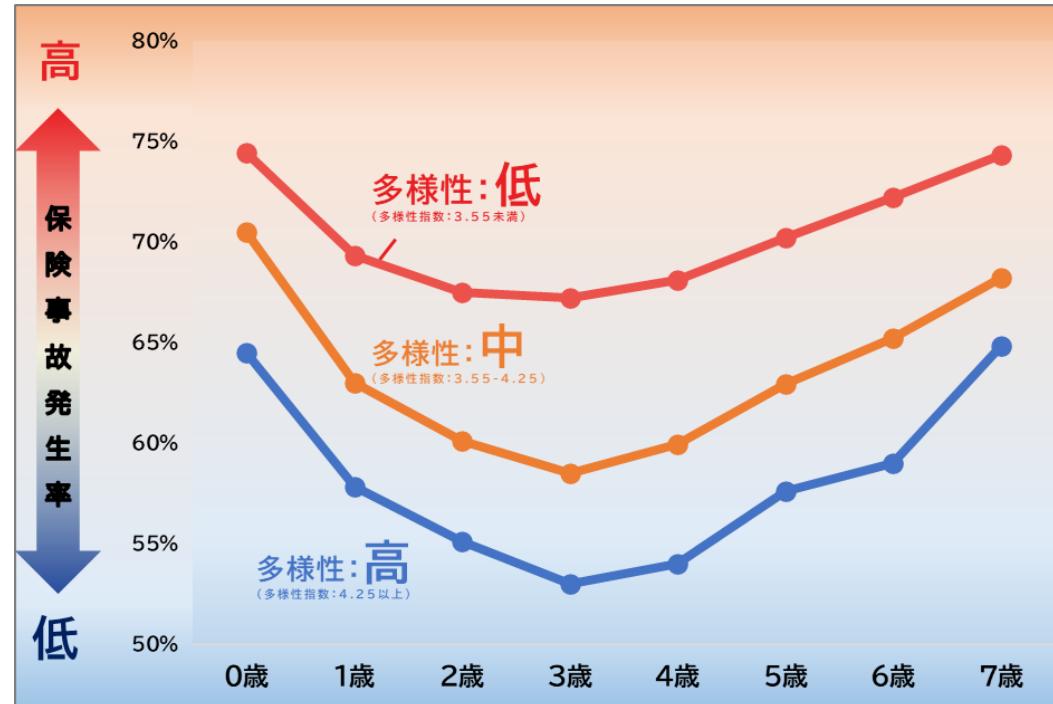
3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(3)もっとも免疫が活躍している場所が消化管

- ①消化管内には、極めて多くの微生物が存在しているが、すべてと戦い続けることは困難
- ②自身に悪影響を与えない細菌等に対しては、許容し、それらの競争的排他環境を利用し、自身の免疫環境を構築している
- ③即ち、味方をしてくれる細菌等を多く識別しているほど、免疫機能を高め得る可能性がある。
- ④免疫の成熟度合いの一つ指標として、味方ともいえる常在腸内細菌に対する寛容度合いがあり得る

<腸内細菌の多様性数値と保険事故率>



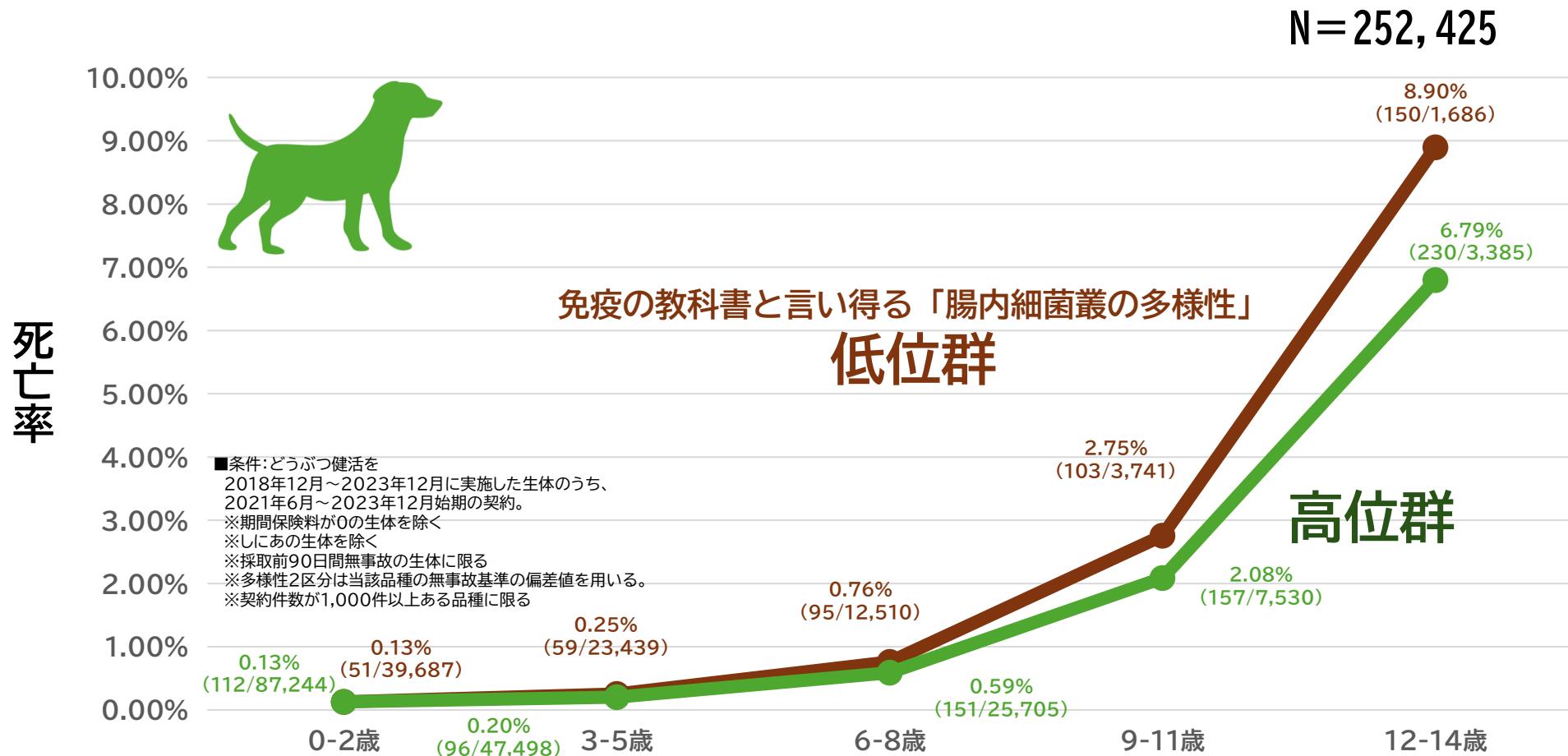
「腸内細菌叢の多様性の高さは免疫の成熟度の指標の一部となり得る」

3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(4)腸内細菌叢の多様性と死亡率・各種疾患との関連について

①死亡率

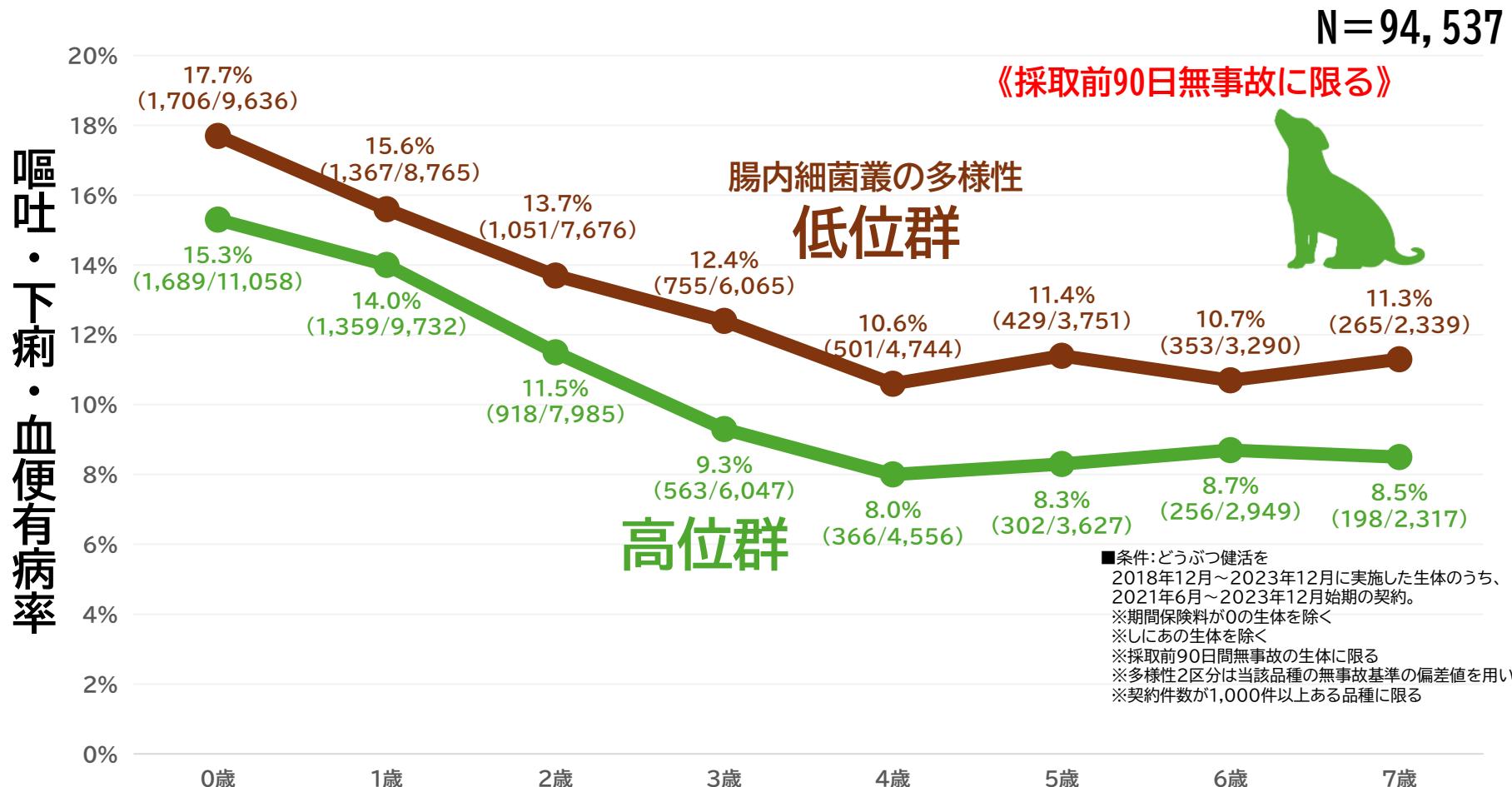


3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(4)腸内細菌叢の多様性と死亡率・各種疾患との関連について

②各種疾患との関連

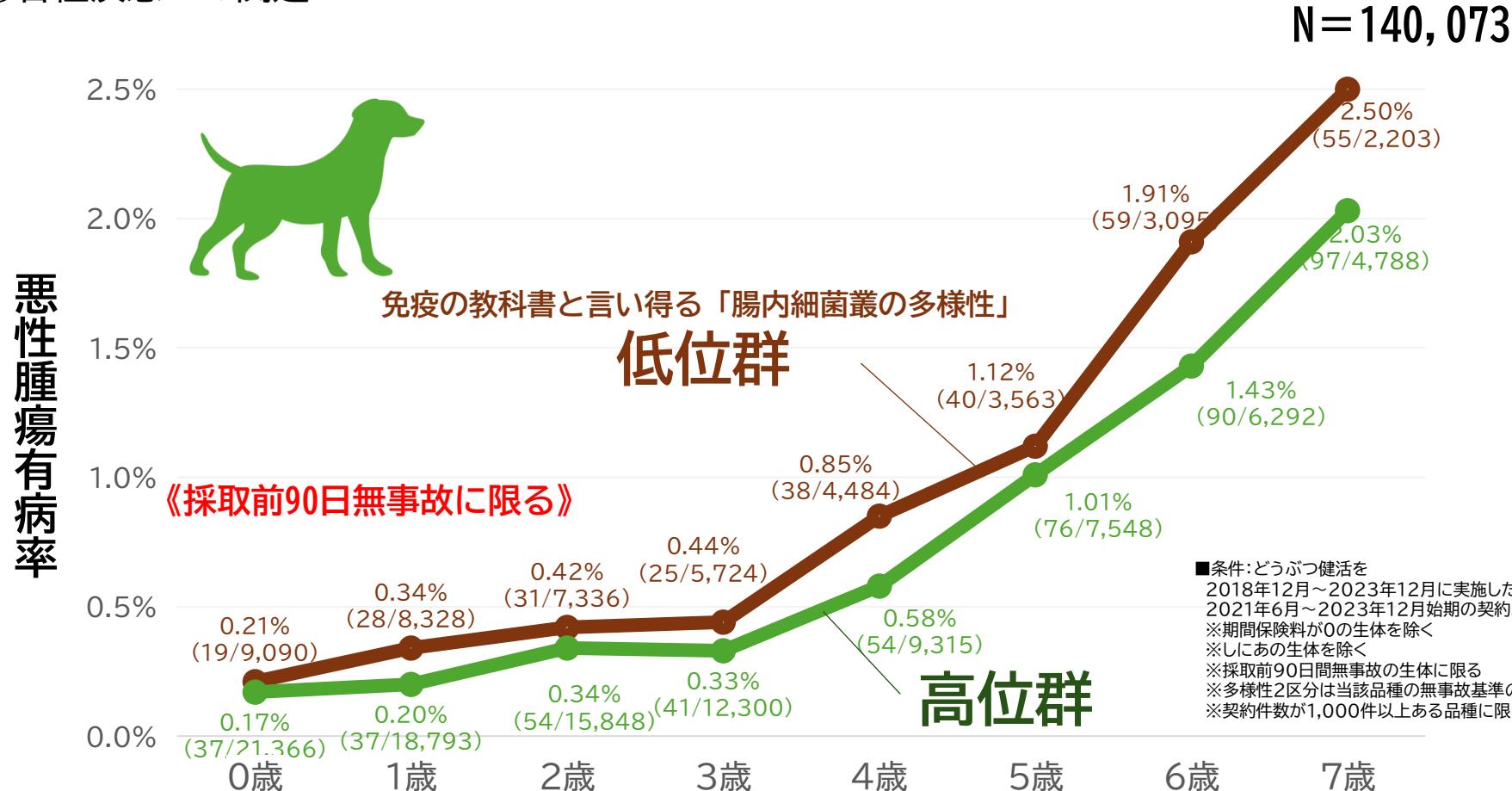


3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(4)腸内細菌叢の多様性と死亡率・各種疾患との関連について

②各種疾患との関連



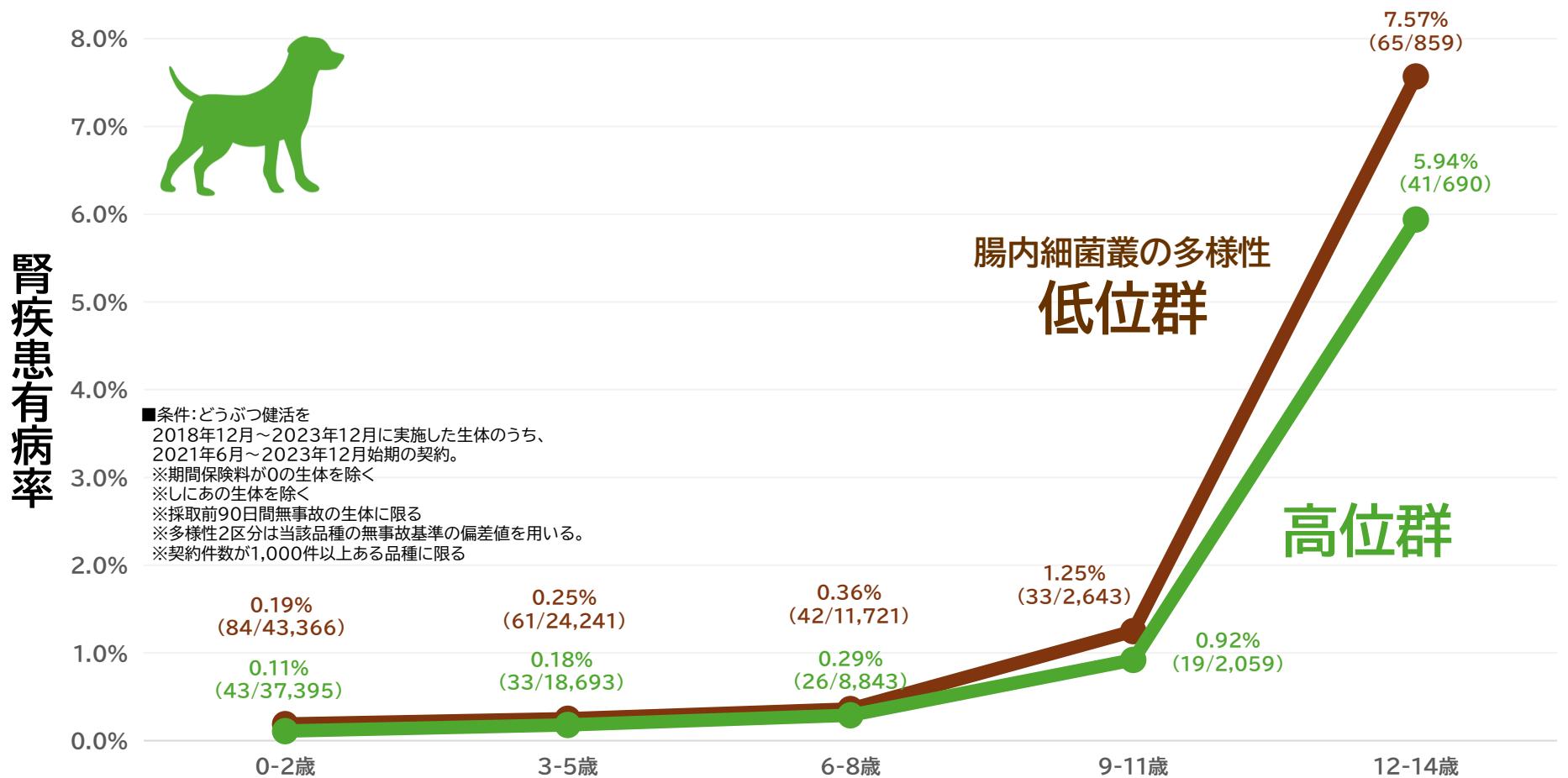
3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り

(4)腸内細菌叢の多様性と死亡率・各種疾患との関連について

②各種疾患との関連

《採取前90日無事故に限る》

N=150,510



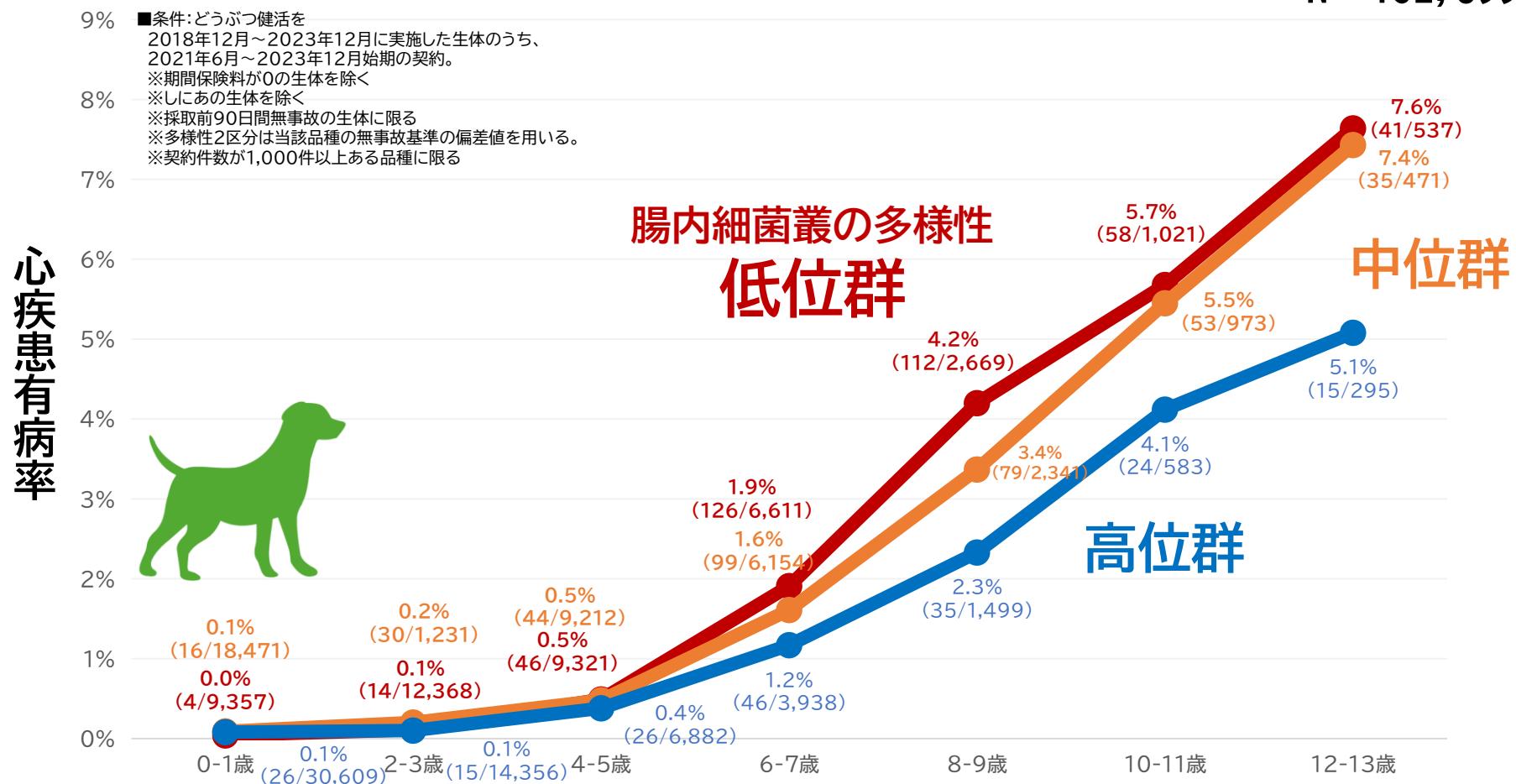
3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り

(4)腸内細菌叢の多様性と死亡率・各種疾患との関連について

②各種疾患との関連

《採取前90日無事故に限る》

N=152,899



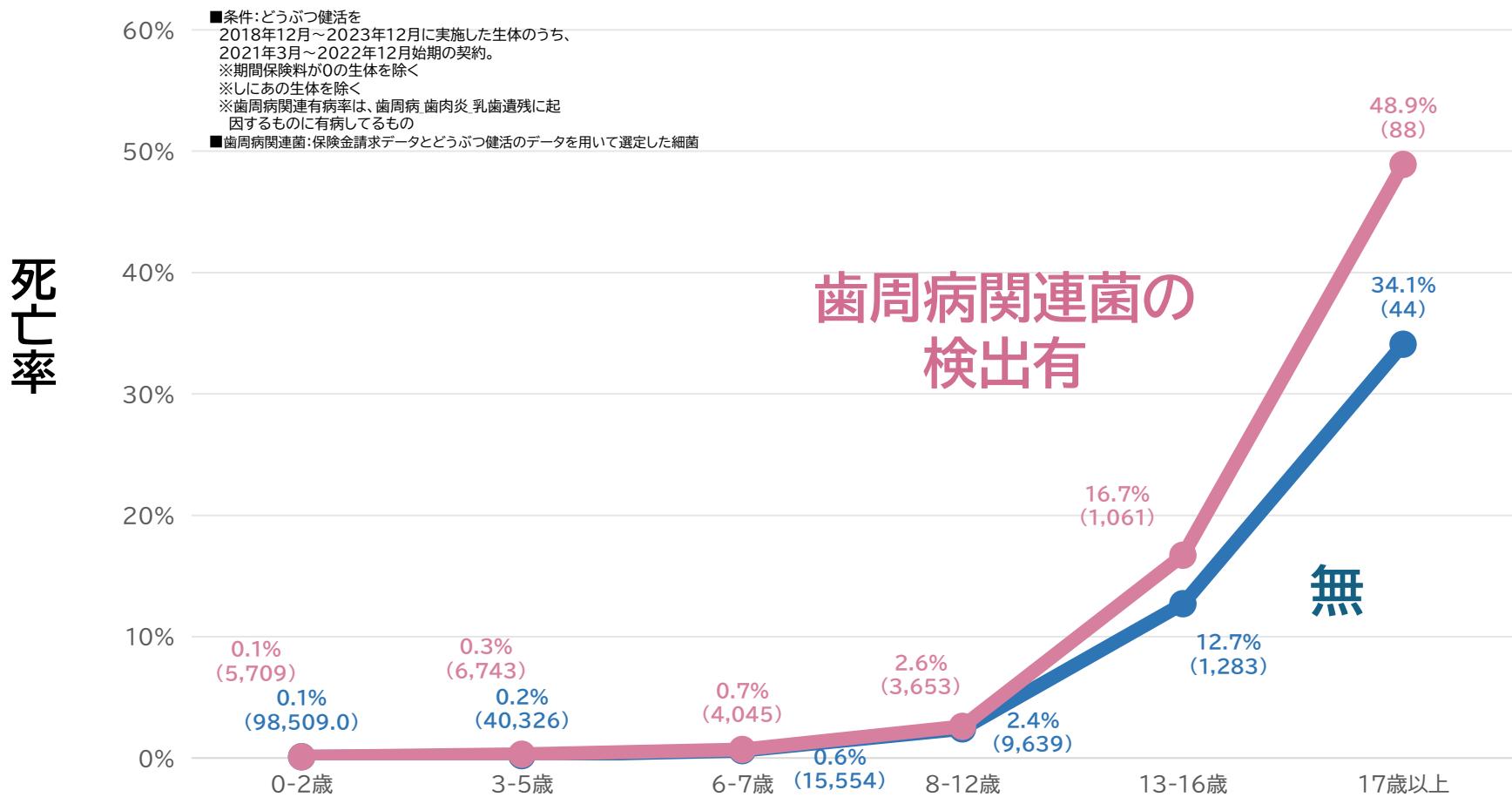
3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(5)歯周病は慢性微小炎症を引き起こし、全身性の疾患リスクを高め得る

①死亡率

N=186,654

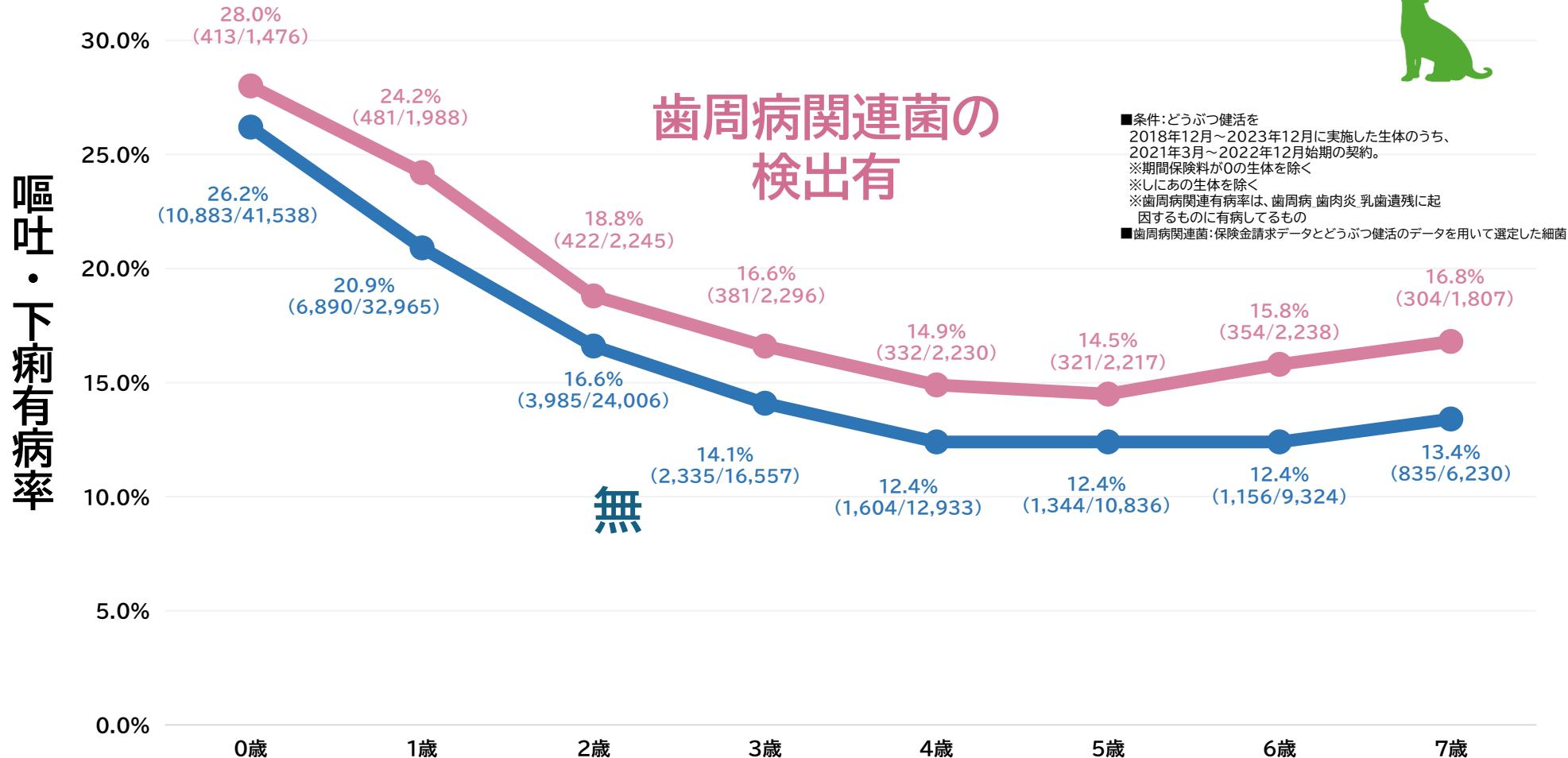


3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(5)歯周病は慢性微小炎症を引き起こし、全身性の疾患リスクを高め得る

②歯周病関連菌と各種疾患との関連

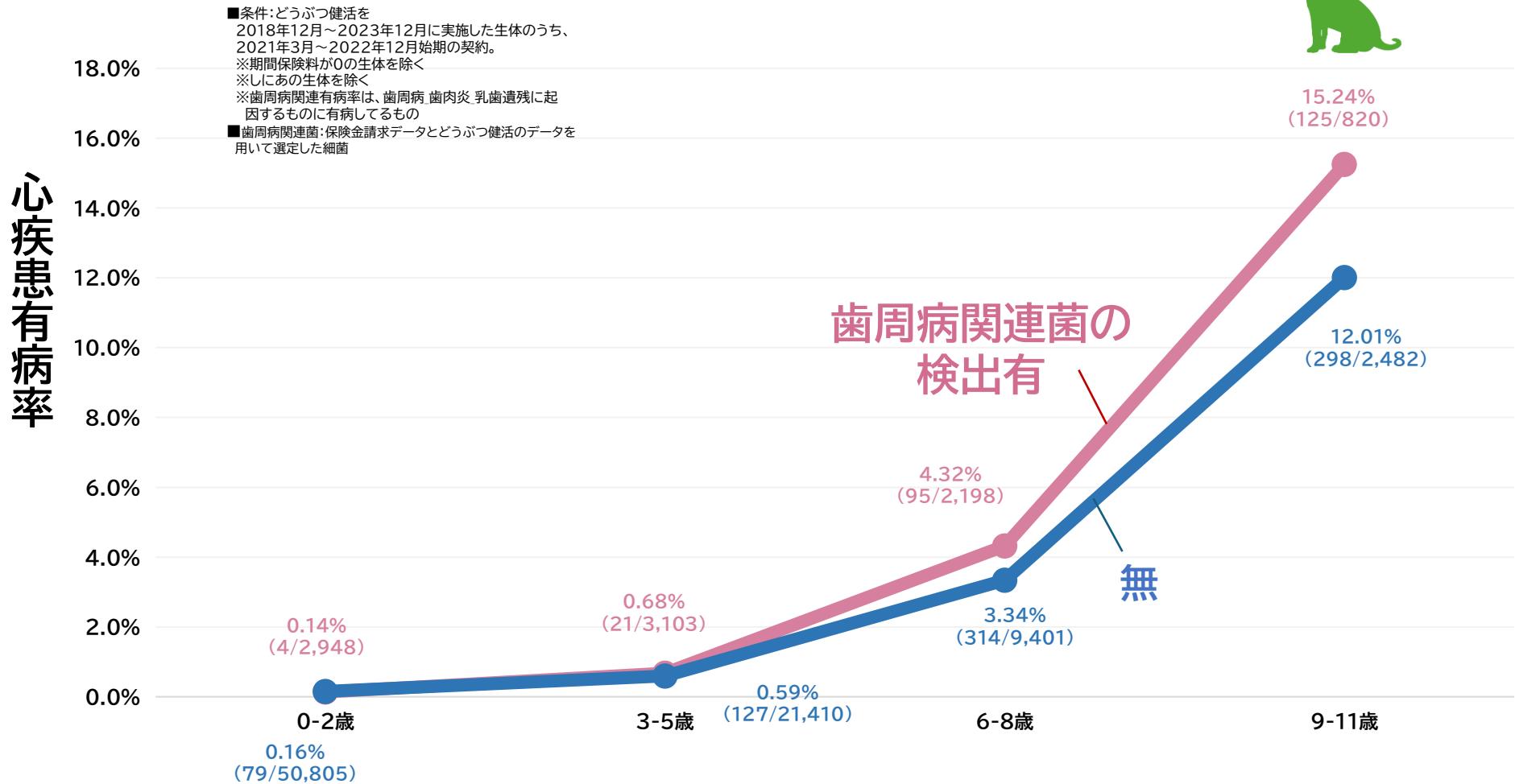


3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り



(5)歯周病は慢性微小炎症を引き起こし、全身性の疾患リスクを高め得る

②歯周病関連菌と各種疾患との関連



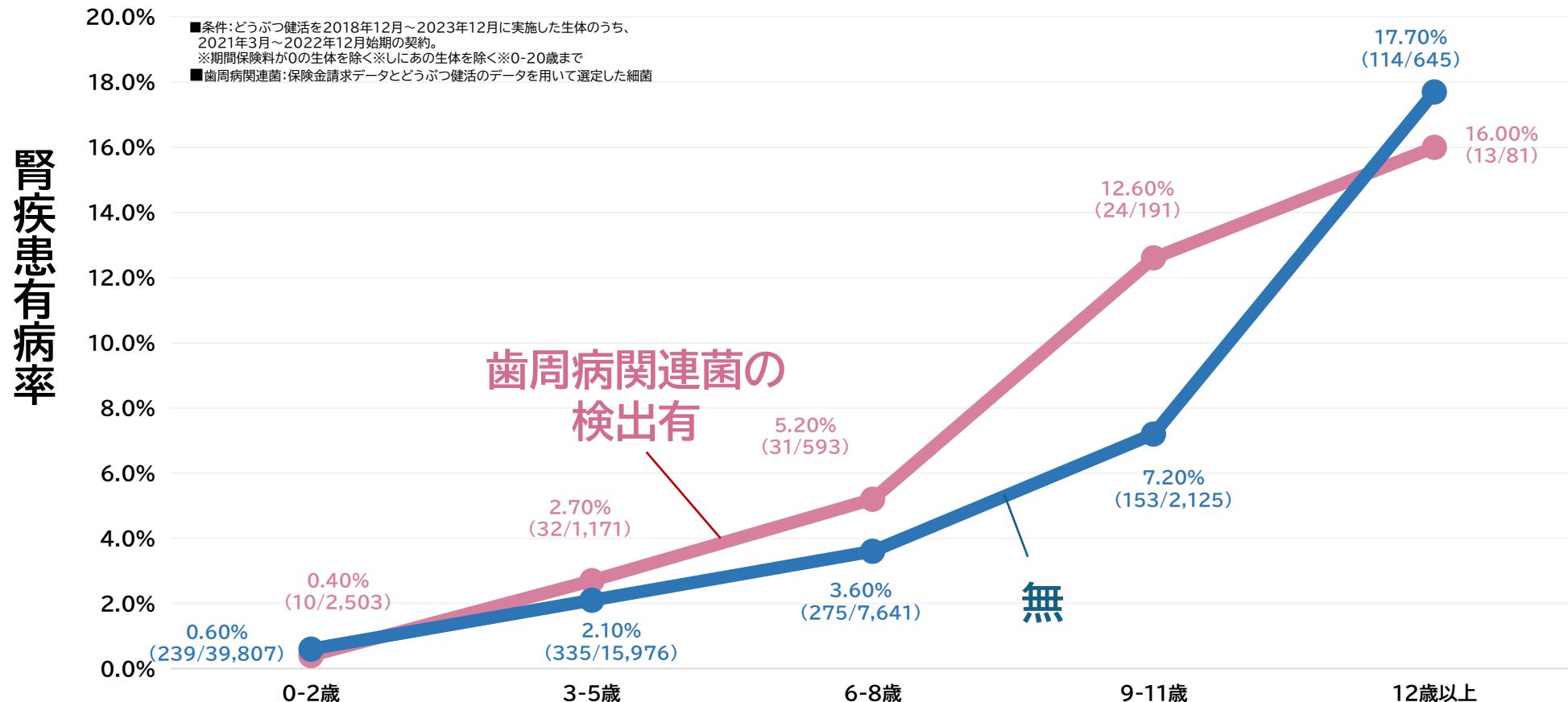
3. ペットにおける新たな生活習慣の偏り

anicom

(5)歯周病は慢性微小炎症を引き起こし、全身性の疾患リスクを高め得る

②歯周病関連菌と各種疾患との関連

N=70,733



4. 「保険の保険」の実装に向けて ~当たり前のこと当たり前に~

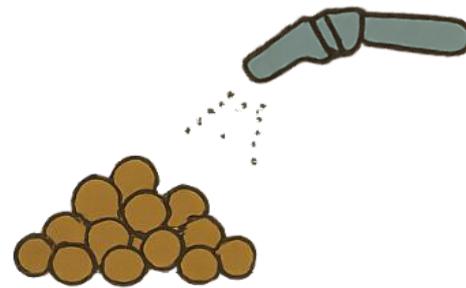


(1)私たちの身体は食べたもので出来上がっている

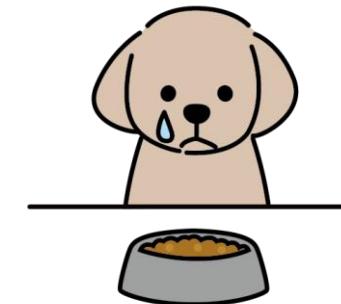
①ペットフードと酸化=老化の関係

開封後1か月等の期間をかけてペットフードを与えていることが多い

嗜好性アップのため
脂でコーティングされていることが多い



脂は酸素に触れると酸化しやすい
酸化=老化



従って、個包装・開けたて**フレッシュ・フード**があり得る
*酸化ストレスは老化関連の要素の一つ



4. 「保険の保険」の実装に向けて ~当たり前のこと当たり前に~



(1)私たちの身体は食べたもので出来上がっている

②単調なたんぱく源

ペットフードは、経済的理由から、「鶏・小麦・トウモロコシ」を用いていることが多い。

長期に亘る単調なたんぱく源の摂取は、アレルギーリスクを高め得て、免疫の成熟に資していな可能性がある。



順位	アレルゲン	割合 (%)
1	鶏卵	34.7
2	牛乳	22.0
3	小麦	10.6
4	木の実類	8.2
5	落花生	5.1

調査対象：何らかの食物を摂取後60分以内に症状が出現し、

かつ医療機関を受診したもの (n=4851)

出典：消費者庁

「食物アレルギーに関する食品表示に関する調査研究事業」

(2020年)



順位	アレルゲン	割合 (%)
1	小麦	24.7
2	乳製品	22.1
3	鶏肉	19.7
4	牛肉	15.9
5	卵（鶏卵）	15.5

調査対象：獣医、食物アレルギーもちの犬を飼っている方

獣医師 (n=550)、飼い主 (n=502)

出典：株式会社ネイチャーリンクス

「アレルギーもちの犬に対する健康管理」

(2025年)



多様な食材を用いた新たな「ペット・フード」があり得る。

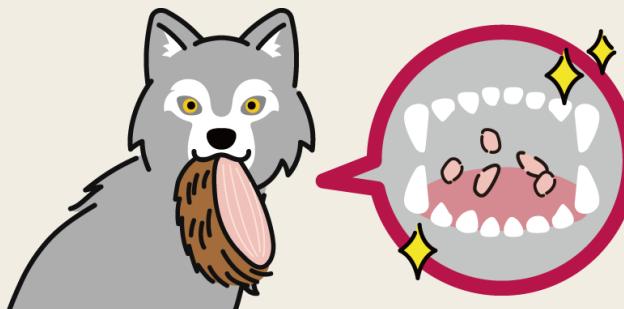
(2) 歯周病は感染症であり、万病のもととなる可能性

① 野生時代は毎食が口腔ケア

歯垢が溜まりやすい口腔内環境

1

「エブリディ歯磨き」から
「歯磨きしてもらう」時代へ

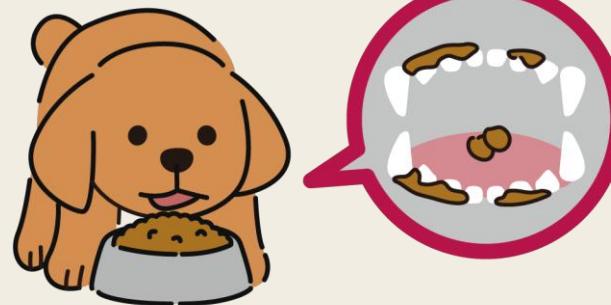


毛ごと肉を食べており、
食べている肉も纖維質

毎日の食事が歯磨き状態だった

2

粘土状のごはん

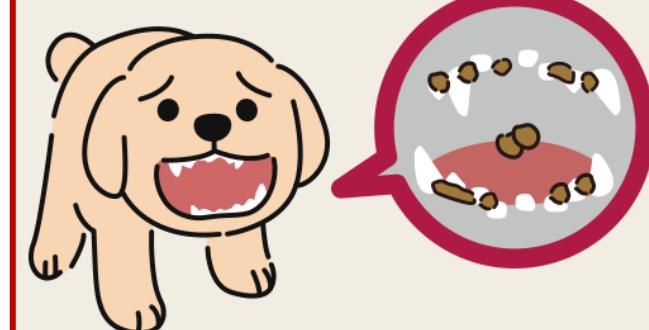


総合栄養食の原料は
犬が太古から食べてきたものに倣っている
しかし、加工方法が不健康！

調理方法も本来の食事に合わせ、
ホールフーズが好ましい

3

小型化で歯並びが悪化



小型化に伴い、顎と歯の大きさが合わず
乳歯遺残が多く発生

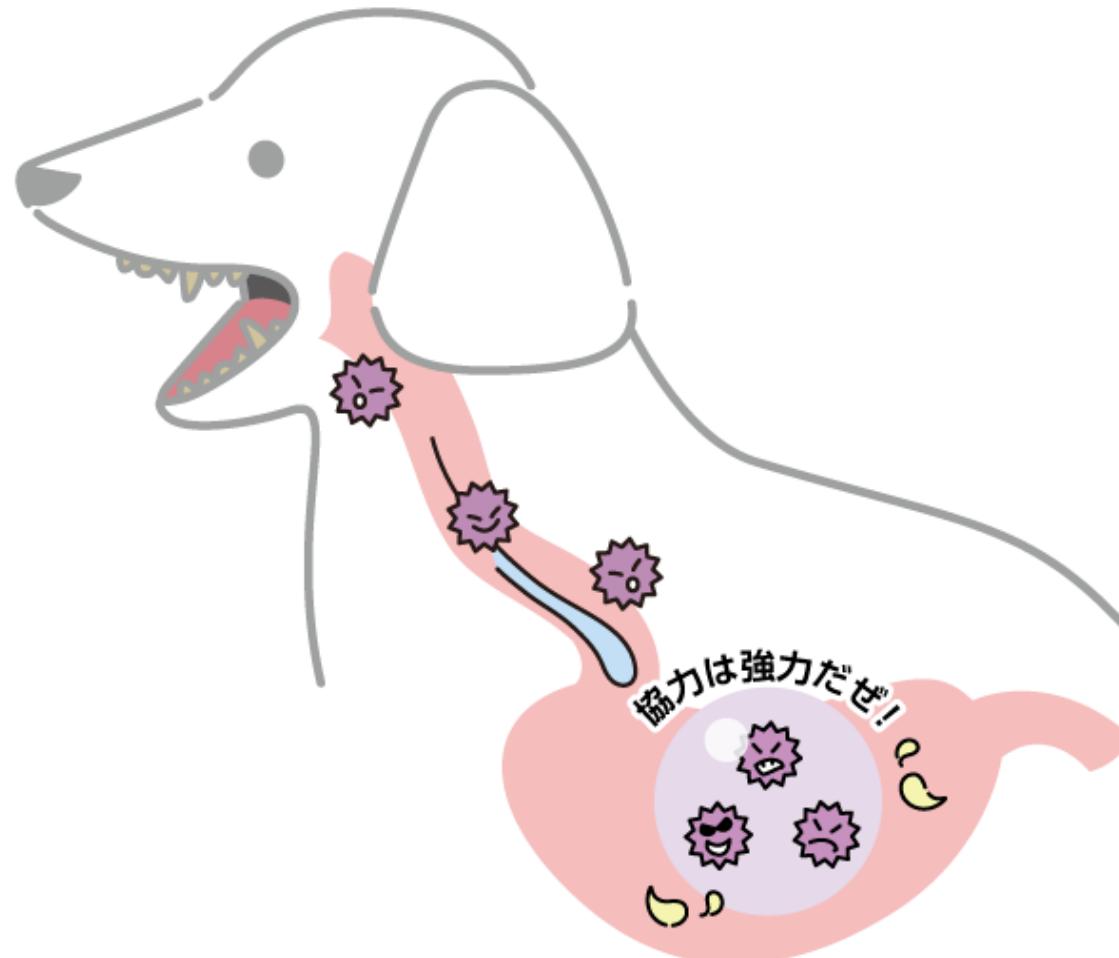
歯並びが悪くなり、
粘土状のご飯が歯に詰まる

4. 「保険の保険」の実装に向けて ~当たり前のこと当たり前に~



(2) 歯周病は感染症であり、万病のもととなる可能性

②歯周病は、バイオフィルム（細菌たちの住処であり・バリア）を形成し、口腔内のみならず、唾液に乗り消化管に流れ込み続いていることで、消化管免疫にも影響を与えている可能性がある。

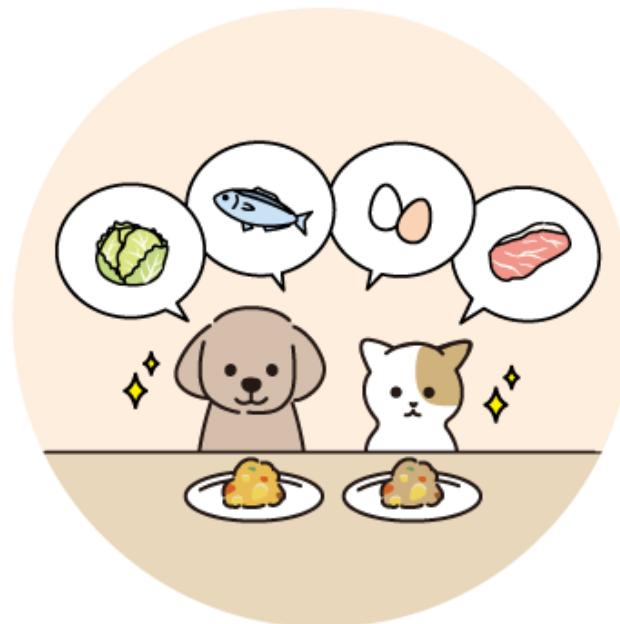


(2)歯周病は感染症であり、万病のもととなる可能性

③ヒト同様に、口腔ケアが重要と言える

どうぶつも人間と同じように**多様な食べ物**を食べて、**口腔ケア**しなければならない。

あたりまえのことを当たり前に





私たちは、医療費が上がり続ける未来を前提に
逃げのではなく、医療構造リスクそのものを引き受けにいきます。





CO anicom®